

369
495

現代新進俳句集



昭和十二年版



始



特232
14

現代新進俳句集



はしがき

句集と名づくる句集は過去、現在を通じて既に多く刊行されてゐることは、今更ら此處に喋々云ふべきでもあるまい。然し乍らそれらの句集が、中には綜合句集もあるし、派閥的な句集もあるし、個人句集もあるし、種々雑多ではあるが、それらが既に過去の形となりつゝあるのを吾人は知るのである。何故か、それは色々の理由があるかも知れないが大體に於いて餘りに作者を無視してゐる爲であらうと思ふ。

作者を無視する種々の事項を擧げるのを今は出来ないが、本書は作者本位と云ふことを意識して、いやむしろ作者各個の句集と云ふことを主體として綜合編纂に勉めたものである。であるから總體的に見れば中には多少レベルの低い句もあるかも知れないが、その作者自身にとつてはその一年間の最も良い句であるかも知れない。然して其處に句作態度に對する作者の鋭氣を感受するのである。

一體に伴句を作る場合は、自己の感情を赤裸に表現するのと、自己の感情は隅の方にやつて了

つて一つの形式に依存して作句するのと、形式或ひは風格を自己のものにして感情を表現するのと三つに別けることが出来ると思ふ。勿論細かく論ずれば最限がないが、大體此の三様に當てはまる、そして自己の句の格を確立した時が一つの完成へ到達したと云ひ得るのではなからうか。

本書に収録された作者は住所録索引にある通り色々な派の作者が各々の持つ特徴、或ひは特質をあからさまに露出してゐると云ふことが出来る。尤もまだ全的にではないけれども當書房に於いては逐年動員して此の「全的」にする用意及び覺悟を持つてゐるものである。本書に収録された作家は勿論、一人は一人を、また一人は一人をと次年版には是非御助力を願ひたい。

本書は作者自身の上き句集であると同時に、更に亦最も讀みごたえのある鑑賞句集でもあるのだ。それは作者別である故にその作者の意圖、作風、及び句を通して作者の姿を直截に感知することが出来るからである。作者は春でも、夏でも、秋でも、冬でも、何時でも一人しか居らぬ。それをいろんな異なる作者をこちや／＼に載せては、一作者の持つ感情を感知する量が少ないと思ふのである。まぎらはしさと云ふものがないから各作者を充分に觀察出来るのである。

また本題の新進と云ふ意味は新しく進む、と字義のまゝに受取つて欲しい。新進作家であると同時に常に新しく進む作家でありたい、そして此の新しく進むと云ふことは決して異表に出た句

作を意味するのではない、これは一に作者自身の心の持ち方に依る外はない。諸賢一層の勉強を祈ると同時に、本書に賛意投稿された各位に厚く御禮申上げる。そして今後共より一層の御共力をお願いする次第である。

昭和十二年三月十五日

新進俳句集輯纂所にて

代 表 者 識

現代新進俳句集 目次

| | |
|---------|-----|
| 作品 | 二 |
| 作品課題吟秀吟 | 八六 |
| 作者住所録 | 九三 |
| 俳句雑誌目録 | 一〇九 |
| 俳書レヴュー | 一一九 |
| 編輯餘語 | 一二七 |

艸書房藏版
新進俳句集輯纂所編

年刊
現代新進俳句集

昭和十二年版

霞 梅 惜 新 菊

春 涼

千葉 相川 天民

吟杖を曳くや野川に霞む風
中く^レに咲かぬを梅の見頃哉
檜笠大和に春を惜みけり
新涼や風も目に立つ磯歩行
國の香の漂ふ菊の日和哉

大阪 秋田すみれ女

初雀千兩の庭をついばみて
椿落ちて仰ぐ梢の東風つよく
京の春豌豆御飯に早くして
海驢の檻落葉かたまり掃かれけり
塗火鉢客となりたる冬座敷

滿洲 淺野一青

初 午

初午や霾る風の出で初むる

夏 の 雲

ラマ塔の四箬亡びぬ夏の雲

柳

胡砂あげて木靈離るゝ柳かな

種 蒔

種まきの冷めたき晝餉むさぼりつ

寒 暁

音さやか撞球の離れてゆく寒暁

兵庫 足立 露 艸

春の雪いつしか雨となりにけり
春の草瓦のかけらかくれぬる
五月雨に谷川の音猛りけり
十薬の匂してゐる清水かな
行く秋のあはれさ猶も鶏頭花

北海道 天野 光 風

芒 青 茂

嵐

月の夜のふるさとの家も茂るらむ
青嵐目にふるゝものやはきなり
風ゆれに芒青みて水青み

暑 さ 微びんまの延び切つてゐる暑さかな
初 荷 初荷曳く鈴朗かに聞えけり

秋田 荒川七樹園

蝻 陽まはり来て蝻のいのちぬくもりぬ

冬 空 冬夜空我が影小さく吹かれぬる

大根引 雲の上の雲の流れや大根引く

焚 火 馬の顔大きくゆれぬ夕焚火

枯 木 枯木影硬く思ひつひたに行く

秋田 荒川 晴湖

春の雪 春雪を馬汗出して唯ひにけり

忍 冬 忍冬の花咲く垣に沿うてゆく

夏 の 月 屋根草に風の出てるつ夏の月

枯 木 枯れし木の中に枯れし木あたたかく

同 枯 木 枯木中鳥啼く方へ歩みけり

東京 池田 柞葉

霜 夜 一筋町月の照らへる霜夜かな

冬 の 夜 自動車にも言はず乗る冬夜かな

冬 の 月 蒼さ極まる木屋町べりの冬の月

炭を焼く 炭木伐るやたまの蒼空なつかしく

冬 田 林の道をゆく人の見ゆ冬田原

茨城 石井 淡流

蛙 後足に田螺ひきづる蛙かな

麥 秋 麥秋の中や一字の茂りあり

鳥 渡 出て見れば爽籟ならで鳥渡る

行 秋 行く秋や皂角の實を風渡る

薄 暑 葛の花淋しと見たり山薄暑

東京 石川 凡宇

夏 雲 連らなりて夏雲街の上にある

蚊喰鳥

藪添は暮るゝに迅し蚊喰鳥

霧

麥浪の空のまぶしう風渡る

紅葉

山霧に吹かれて木々の青かりき

奉天

山肌の霧のうすれに燃ゆ紅葉

石原沙人

元宵

坂の雪元宵の灯を見おろしに

つちふり

つちふりに河水あとかたもなき

虻

人喰ひ虻我に來むかふ草の雨

枯野

のぞきからくり人呼べば蠅舞ひたちぬ

上海

城門の外の枯原人に逢はず

石野瓦ト

入學試験

歸らじと期せし入學試験かな

夏帯

夏帯や世帯やつれをあきらかに

年始

上海兵の警備す街に年始かな

初鳥

山の手は深き紫紺に初鳥

年末賞與

弗の値の底で渡りし賞與かな

ポinas

ポinasに夏の病のひよきたり

ポinas

ポinasに人間の價値定まりけり

愛知

稲垣法城子

夏

夏山や何の花かも匂ひ來る

春

春寒き寒竹の根のあらはなる

春

白木蓮山がくつきり蒼みゐる

秋

木瓜の實の匂ふがに牙ゆ今朝の秋

冬

雪はらつて南天の葉のかがやかし

三重

稻垣佛座草

轉

轉や朝日まとの大藁家

青

櫓の音の間に聞えて青

盛

満を煮る臭漂ふ日の盛り

茸 きめ荒き里の豆腐や茸汁
松過ぎ や袴に残る酒のしみ

大阪 猪羽北峰

新年 斧始め 初春雪の谿間より

春 苗代に汽車の灯映りうつり消ゆ

夏 青嵐蒲吹き挽め吹きたはめ

秋 大淀の無月の舳飛ぶ羽音あり

冬 探梅や汐見櫓に日はなゝめ

大阪 榎本一艸

枯野 此あたりいつか枯生となりにけり

葱 一籠の葱をたらべてしまひけり

同 葱洗ふや野川の水のひやゝけき

萩 啼つれて空行く鳥や萩こぼる

コスモス コスモスに月の出冷ゆる垣根かな

東京 伊東藤花

春雨 春雨に吹かるる道は青かりき

夏帽 地下鐵に入りて夏帽碧みたる

蟻 落つ花をすこし避けたる蟻の道

青芒 青芒もつれはなくて伸びけらし

夏やんま 行き戻りこの庭戀ふや夏やんま

熊本 市原悠々

新年 五岳外輪雪静なり弱日影

春 ぐぬ木葉の春の紅葉や小松原

あけほのや鶯の鳴く阿翁の宮

門にきく山寺の鐘さわやかに

いなごとぶ谷川の水静なり

福岡 今村溪水

初曆 春着裁つ日を選びけり初曆

長閑 長閑さや舟に居眠る 渡守
はらみ鹿 眠るにも草を褥や孕鹿
はぜ紅葉 傾くや萩の中なる水車小家

徳島 岩倉 玉兔

春蟬が山の燈籠に羽うてる
青嵐 軒の檀色をどる

鶉 遠く枯葉まぢりの草を刈る
踏みもどる柳散り葉のまるべるを

立春の宵月徑のほの暗き
岐阜 工富けんじ

友は来ず冷し西瓜の齒にしむる
蚊張しまふ何か淋しき夜長なり
落つる葉も無くて静けき冬木立

春近し 落葉踏む足にさゝやく春の音
冬長閑 雪間行く樵夫の數や冬長閑

東京 岡村 桂 夏

ひこばえ 薬に軟く雨そゝぎをり
蠅生る まろくと蠅が生れて陽にゐたり

砧 夕風呂を母に進めて砧打つ
蠅群れて乳兒の眠り醒ししよ

干柿 干柿のほどよき色に黒みけり
滿洲 萩本ム弓

書 初 誰も見ぬ書初貼つて旅立つや

雛 胡地なれば兒の寫し繪に豆雛を
一齊に西瓜を食べて海を見ず

月 風原や月となりゆく草の色
樹(霧氷)花 日に酔うて樹花は淡き暈つくり

石川 表 鶴 城

野を焼く

妻と出て野を焼きをれば暮れにけり

燕

雨のまを苗代かすめ来る燕

早乙女

早乙女の笑ひ田の面を明るうす

秋 草

秋草の野を働きにゆくひとり

霧

炊煙の霧となりゆく朝ぼらけ

大阪 大島 錦 溪

秋

朝顔の枯葉すかして生駒山

秋

窓ぎはのコスモス咲いてうす寒し

栃木 大塚 竹 臺 子

寒明き

寒明きのくたれ葉にある日のしめり

春 曉

春曉やつちくれぬいてあやめの芽

時 鳥

ほととぎす降りぬく夜のあやめかな

三 日 月

畑ヶ仕舞の母に來し子や三日月

大 寒

大寒の晴れを風鳴るくぬぎの葉

熊谷 大森 葦 山

初 東 風

初東風や富士より空の晴れわたる

朧 夜

朧夜のいつ降り出して静か也

夏 雲

夏雲の湧き上りけり蜜柑山

鴉

鈴懸は枝下ろされつ鴉の鳴く

雪

雪を散らして庭木の枝の小鳥かな

愛知 大場 望 海

岡崎場趾

花吹雪緋鯉あつまるお舟着き

漁舟に布子干し有り梅雨の入り

蒲郡海岸にて

伊良湖崎呼べば應へむ五月晴

島裾のくらみに匂ふねむの花

とげさんこの實を探り遊ぶ女の子

愛知 太田 窓 芳

秋

湯あがりの新妻艶に梨を剝く

同

失職の眸に鶏頭花燃ゆるのみ

同

蒼穹はコスモス映ゆる日に寝れ

冬

歳晩のデパート群集呑吐す

同

歳晩のネオン五色に燃えのぼる

(病床)

薬呑に看護婦林檎汁すゝむ

細き掌に翳す體温表や秋の風

熱にめざめ秋陽じつと凝視居り

土佐犬の眸は炯々と霜の街

人形の冬衣絢爛人の渦

歳末のマネキンガール魅惑的

香川 大林 芳 綾

残 暑
五 月 晴
短 夜
夜 食
日 永

ブドー棚蜂集ひし残暑かな
馬の背に馴ぬ母子や五月晴
行水の後は裸の短き夜
糲すりの済みてくつろぐ夜食かな
永き日に泡を吹ゐる田螺かな

兵庫 小笠原 皓 隼

新 年

初鶏に聞しらみ行く梢より

冬

にほどりの泛べる潟や雪の景

夏

遠くにてきく梅雨山のほととぎす

秋

うれ柿やさそふ眼白の囀り籠

秋

落鮎の魚田の膳や山の宿

兵庫 小笠原 華 壺 女

結ぶ手に帯冷やかや春寒し

チユーリップ葉先いためて春の霜

蝗とりの子に持たさるる袋かな
娘の頸ほそりて見ゆる秋の燈に
牡蠣を割る娘の腕のたくましく

新潟 小川俳洗子

新年

金屏のさんらんとして謡初

春

春の宵共に浮かれて語りけり

秋

新涼や朝の庭石ぬれそぼつ

冬

荷駄馬の遅々たる歩み秋暑し

戀

小夜千鳥なくや濱邊の遭難碑

静岡 小野田典史

夕

戀猫の背を摺りよすや朧の夜

草

夕立の外れし埃の暑さかな

夕

馴鹿の糞に草萌の港かな(カムチャツカ)

立

夕立晴れ海面盛りあげ魚群れ來

秋風

ポプラ道馬車は秋風に吹かれゐる

栃木 小笠原穂洲

早春の空へ照りこむ麥の線

大那須の梅のこぼるゝ道に來し

遠郭公山越しの雲白けたる

櫓飛んでいつか雪海暮れてゐる

雪雲の光さめゆく河岸の榛

秋田 加々谷史洲

渡り鳥

渡り鳥小粒となりし畑の茄子

雲雀

揚雲雀我が身も杖も横たへつ

菜の花

菜の花や大河端の薄月夜

行々子

出水たゝへし大芦原や行々子

茸

柏葉に打つ木雫や茸山

静岡 勝又桔梗子

蜜柑 登り詰めて輝く海や蜜柑山
 萱刈の大辨當を背負ひ込んだり
 スキー 樹氷木花旭に燦然とスキー行
 春眠や優しく起す妻の聲
 宵の春 慣れ初めて妻朗かや宵の春
 星涼し 黍の穂の支ふる空や星涼し
 雉子 芒畑つて足もとに翔つ雉子かな
 女郎花 女郎花清し朝風渡り来る

北海道 葛西朗風

新年 試筆會硯に墨の雲を捲く
 春 草萌や朽ちし草履を囲みつゝ
 夏 燈籠提げてゆく嬉しさや草染むる
 秋 一霜をあびて葡萄の山は晴れ
 冬 雪紐の朝の風に切れゆくや

神奈川 金田露香

二日 ビラ撒ける廣告飛行二日かな
 若草へ萬國旗はためき影す
 夏の灯 虫が飛ぶ夏の灯のもと顔剃らる
 蜻蛉 話し合へる一人の肩へ蜻蛉來ぬ
 日向ぼこ 子守唄に寝る子寝ぬ兒よ日向ぼこ

埼玉 金谷源太郎

元日 元日や神都の風に觸れて佇つ
 山笑ふ くすぐるが如く鳥鳴き山笑ふ
 水鶏 曉の産湯に灯す水鶏かな
 木の實 小鳥等と共に木の實の朝に居し
 石路の花 花石路に睫毛を俯せし眸がありぬ

尼ヶ崎 河合白雲

夏 瀧しぶき蜘蛛の巣しるく光りけり

秋 秋 冬 冬

霧雨となりて祭の燈入りたり
青北風の山のむらさき近くある
神さびて庭燎の烟ましろなる
暗がりの煖爐の明りたのしみぬ

高知 川村 志秋

秋

おとなしく刈田耕いてる仔牛かな

冬

初雪に古き火鉢の一間かな

冬

冬枯れの落葉を踏みて犬の行く

冬

飯積山冬雨霏にかくされぬ

冬

庭先の散りし紅葉や時雨雲

石川 川端 健甫

櫻

遠乗の手綱に匂ふ櫻かな

夏の夜

林苑の苔より暮れて夏の夜

百合

薄れ行く谷間の霏や百合の花

野 菊

蝶一つ野菊にさわる日和かな

雉子

雉子鳴くや山の麓の野火細る

夜長

海なりの夜長の我に迫り来る

時雨

繪馬堂に鳩の時雨れてふくれぬし

長野 柄澤 壽井泉

蛙

蛙げろく月となり行く山沼

日傘

連れく野となり日傘まわし行く

残暑

小山田の稻熱病止まらず残暑かな

新酒

温泉疲れの重き日を汲む新酒かな

年賀状

年賀状都の人となりて娘は

東京 岸田 豊晴

秋

虫鳴くや野道の果の雲崩れ

秋

朝晴れの月見て居たり山焼ける

春

山霧と見しが雨なり竹の秋

冬 冬

山火事の消えてしまひし夜寒かな
小春日や蜘蛛の巣着けて蜻蛉とぶ

神戸 木村 愁人

春 春

犬連れてそゞろ歩きや宵の春
花うけて流るゝ川の蜩かな

夏 夏

蚊遣火の流れれて低し夏の月
かはたれの重たき空や渡り鳥

秋 秋

白鳥澤 静かなる 春陽かな

北海道 北村 歌仙

蛙 蛙

暮を行く蛙道蛙競り鳴いて
とつぷりと暮れて明るき青田かな

紅 紅

川底の小石つぶらや散る紅葉
萩の花木の間にこぼれ大日和

萩 萩

垣穂吹く風の迅さや秋の聲

秋 秋

の 聲

東京 桑原茶京子

冬 冬

丘原や枯葉まじりの冬の笹
丘の濡れ足に沁むなり枇杷の花

枇 枇

花 花

小 小

丘につゞく丘よりの道小春かな

短 短

日 日

短日や八ツ手に雨の降りとうす

夏 夏

雲の夕焼子等をとよめて唄はする

雑 雑

詠 詠

夕立昏み濱のテントは寒くなり
軽きつかれ仙人掌の花くづれたり

同 同

濱風の涼しさ紫蘇の色濃かり

同 同

炎天の白浪鱒は高く飛びし

同 同

雲にやせて咲く小さゝよ葛の花
水ひたゝ青蘆のぼる虫ありぬ

東京 小島 景信

夏 秋 冬 秋

神苑や小鳥さへづるはるや春
秋晴や雉子の飛たつ枯の道
雨雲に五位鳴きながらかくれけり
日當れば蛇の來るなり花南瓜
水潤るる河原のあしや石たたき
ゐるはく蝗飛びちる稻の秋

大阪 兒島 紫竹

元 且 日 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶
春 日 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶
胡 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶
暑 さ さ さ さ さ
寒 さ さ さ さ さ
初 日

元旦の下駄を疊に履く子かな
ついて来て猫のされつく春日かな
流るゝと見えて茶につく胡蝶かな
山越えて又一山の暑さかな
寒かないと出て行く兒の寒さかな
丑は皆初日を浴びてはむかし

秋田 小林 雲路

鳥 巢 裸 色 短
鳥 巢 鳥 日

巢を護る鳶の大輪の晴れ日哉
裸にて飯食ふくせとなりけり
錦木にまろく遊べる秋小鳥
短日や木をならし去る鳥のあり

千葉 小林 映洋

麥 踏 湯 葉 雨
麥 湯 葉 雨
松 葉 雨
秋 雨
霜

麥踏やかたく結びし頬冠り
大釜のくすぶつてゐる麥湯哉
裏庭の晝深く松落葉かな
奥殿の灯の黄色なる秋の雨
霜白き靱がらに來る雀かな

東京 小林 羅衣

夏 春 春

青嵐何かきらめく硝子店
蝶飛んで張板の紅絹光りけり
野疲かれの肩叩かす蛙かな

夏 秋

山寺やうしろの谷の秋の聲
砂山にねて波をきく浴衣哉

長崎 近藤 郷 愁

冬

せゝらぎに心おびへて冬の月

春

そだゝべて語るゐろりや春の宵

夏

浦風や櫓脚光りて麥の秋

秋

隣家は童の歌ふ秋夜かな

秋

小望月門をかそかに海の音

東京 小南 齊 圃

春

行潦に李花散りしきて風光る

新

大海原の雲より染むる初日哉

夏

山峽は煙雨頻りに合歡の花

秋

落栗の柴にかくれて朝の露

冬

枯芦原月すさまじく登りけり

新

年

雪晴の月光蒼し 初詣

岐阜 小山田 晴 夜

春

夏近き光のゆるゝ君子蘭

夏

石に焼く鮎や翠翫に香を放ち

秋

巖窟をくゞり來て溪の秋深し

冬

雪こぼして起重機をどる波止場かな

長野 小山 榮 峰

青

麥

青麥に矢の根石あり古戰場

夏

山

夏山や風新らしき樹の匂ひ

新

涼

新涼や嗽の水の清 清し

架

稻

架稻や酒々井の驛の右左り

雪

押

押せばあく戸を敲きけり雪の傘

東京 齋藤 潤 木

表

山火事とみえしも春の山なりけり

蝶 早 秋 霜

碎^カ炭山に蝶が来てゐる午くもり
煙突に雲のさはれる早哉
椎の實のほろゝに秋の影とゐる
まぶたより霜にふれゆく木々の空

栃木 齋藤 高甫

露 晝 麥

顔 笛

桐若木の延びるゆさぶる秋の風
明月やほのめく星のかそかなる
藁の束手にくゝ兒等や月の道
よべの野分け着物乾されてさやかなる
百舌渡る静けき朝や靱を挽く
白露を蹴つて蹄の揃ひけり
晝顔に銃身觸れて伏射しぬ
泣虫がふと麥笛を高らかに

静岡 齋藤斗志郎

濁り 鮎 青 芦

濁り 鮎 鱒 微動して動かざる
青芦に水棹突いて向き變へぬ

長野 酒井 傳

わがパスは朝の芽ぶきの街に出づ
天高く白菊の葉の青きことよ
初霜やもみづりそめしさくらの葉
雨そばつ艸にほたるの匂ひある
木の肌へあえかな夕日雪催ふ

愛媛 坂本 碧水

月 遍 路 夜 光 蟲 霞 遲 日

道に置かれし鶴嘴に月流れけり
軒深く麥の積まれて遍路宿
夜光蟲影のごとくに舟着きぬ
まひまひて遅日の水のみづすまし
鶉のとりは首のながくて海霞

東京 坂輪あづま

蝸 蛸 や 公園 を 出 る 乳 母 車

青 田 生 き 返 る 様 な 風 生 む 青 田 哉

秋 五 萬 石 一 望 に 入 る 秋 の 色

虫 啼 く や 俳 聖 の 碑 の ある 所

枯 野 立 の 御 跡 尊 し 枯 野 原

廣島 坂木 式奇

蟬 梅 雨 明 け て 日 毎 に 暑 し 蟬 の 聲

日 盛 や 焼 け つ く 様 に 蟬 の 鳴 く

雲 の 峰 ち ぎ れ ち ぎ れ て 暮 れ に け り

落 葉 縹 渺 と 見 通 す 林 の 落 葉 かな

兵庫 坂田 眞水

新 年 樹 々 は み な 瑞 氣 満 ち 〳 初 明 り

秋 蝗 と り 株 か ら 株 へ に が し け り

冬 菊 の 鉢 ま し ろ く 濁 れ て 幾 日 か

秋 稻 木 竿 端 か ら 重 み か 〴 り け り

大阪 櫻井 陽春

夏 神 鳴 や 崖 よ ち の ぼ る 蟹 の む れ

秋 夕 闇 や い も の 葉 裏 の ほ の 白 き

秋 爽 か に 朝 露 し め る 大 地 かな

夏 青 葉 山 の う す き み ど り は 夏 の 竹

秋田 佐々木 秋人

雉 子 雉 子 の 跡 追 う て さ み し き 夕 心

二 月 水 音 の 家 め ぐ り 澄 ま す 夜 の 二 月

涼 草 花 の 香 立 つ て 來 る 夕 涼 し

渡 り 鳥 時 化 照 り の 山 と げ 〵 し 渡 り 鳥

雪 日 恙 し 居 る 野 の 風 筋 の 雪 け む り

長崎 貞方 雪柳

種子 倭 種子倭とり出す土間のひよこかな
 胡蝶 甘藍の葉うらにつるむ胡蝶かな
 日盛 日盛や鳥の子供の瀬に漁る
 露 濱へ出る丘の朝露ふみにけり

大阪 黒井 虚木

新年 ひもろぎやあしたゝなびく初御空
 春の闇みくじつぎく燃やしけり
 夏 木影ゆたか道に馬酔木のこぼれるる
 秋 白露や散りてありたる桐一葉
 冬 北風やながる散り葉の黄ばみたり

岩手 尖戸 梨村

茂り 晴れつづき葉の光りなき茂りかな
 冬 風雲にまかれ冬日の小さけれ
 枯れる もろこしののびたるまつに枯れてあり

川蜻蛉
 霜枯れ

風に來て葉影にひそむ川蜻蛉
 霜枯れの葉の散る晝のしじまかな

兵庫 信濃 眞紗 琉

冬 大霜が二日續いてもみちかな
 同 霜下りて枯野は光る水涸るゝ
 同 秋晴るゝ木犀の匂ひいづこから
 同 露の路地藏堂から鉦の音
 同 法師蟬あちこちで啼く森の中
 冬 山の中霜とけ落つる焚火かな

福岡 柴田 露草

紅葉散る谷間の家の夕煙
 炭竈に散込む峯の小雪かな
 はらくと萩むら打つや雨の音

福岡 下田 白哀

初詣 相ひ老ひし竹馬の友や初詣

蝶々や吹き戻されて元の草

牡丹 流れ雲外れて牡丹の影を生む

新涼 新涼や髯打ち振つて草の虫

時雨 屋根の上に抛りあげあり時雨魚籠

茨城 霜多 俊

雪とけて芽麥のうすきみどりかな

枯蓮 枯蓮の水面にうすき氷かな

花祭 落ちつばきふみく拾ふ花祭

稗 稻穂波見えつかくれつ稗とる子

蜻蛉 赤とんぼ小春日和に群れるたり

兵庫 城野 晃 緑

きりぎりす 蔓枯れの瓜に喰ひ入るきりぎりす

観艦式 艦艦ならぶ威容はるかに秋の丘

同 紅葉 寒夜

陸奥長門どつかと泊て、日は落ちる
照り映ゆる山の紅葉や海荒れて
庭の笹すれ合ふ音や夜の寒き
山形 進藤 澄成

雪の聲朗らかに陽の障子哉
ふわくと来るひんがしの雪の波
日暮るゝや雪波野づらに狂ふなり
春風や畔打つ音のはるかより

静岡 菅井 秀峰

桑摘 落葉 笹鳴 柿 月見草

夕焼の空迄赤く桑を摘む
はらくと櫻落葉や海の音
笹鳴や障子をのぼる山の影
夕空へ響く水車や柿の秋
月見草夜の汐遠く落ちにけり

芭蕉 優曇花や廟堂閑に晝の雨
蟲鳴くや子芋を量る月の土間

横須賀 杉澤清閑人

東風 露押して寄す浪明り東風匂ふ

初夏 葉を鑑ふ樹々の雫や夏初め

梅雨晴 梅雨晴れの裏戸出づれば艸の伸び

蜻蛉 蜻蛉追ふ兒を追ふ母の疲れけり

秋風 藪の穂に茜移りぬ秋の風

東京 杉下 青峯

枯蘆 枯蘆の穂鳴に風の綾を見る

初富士 初富士を見る心地よき日和かな

霜 樹の幹に霜る朝の日和かな

今朝の春 雪に暮れ雪に晴れたる今朝の春

冬風 冬風や川の夕焼うすれゆく

大阪 鈴木 慈狼

木の實 木の實降る氏神さまはおしづかに

落葉 あても無く往く舗道よし落葉鳴る

颯風 颯風が去りて空気の澄む舗道

京都知恩院にて二句

銀杏落葉 銀杏落葉踏めば地殻が軋る音

銀杏落葉 鳩しづか銀杏落葉を叩く雨

東京 鈴木 彦星

霜 水晶の國に遊んで霜夜かな

梅 梅の奥棟の祝祠の流れる

月 大魚籠に鬼飼ひあり月の宿

春の川 行先を書きし筏や春の川

冬かすみ 櫻咲く山裾かけて冬かすみ

栃木 鈴木 一石

落葉 落葉かく人のありけり山小徑

凍 朝月夜南天の實は凍てゐる

冬 晴れ続く冬よ富士山よく見ゆる

山茶花 冷える朝山茶花ほろり落ちにけり

桔葉 山旋風枯葉の葉鳴りさわがしく

東京 鈴木 巨浪

春寒し わびしさになるゝはかなし春寒み

茂 夏艸の茂りの露にぬれもすれ

秋の冷え たより合ふ心に寝ぬる秋の冷え

冬の艸 いつをいづこに住みつきかねし冬の艸

雑 今日の日嬉しきばかりひたに歩む

静岡 鈴木 歌舟

春 雀の子出でゝ日渦の流れ居り

春 潮昏らく逃げたる海苔を搔きなぐる

冬 ストローブの響く焰に集ひけり

冬 木枯や縮まり昏るゝ榎茸

冬 鳴き移る笹子浪音眠らする

栃木 住吉 穀雨

薺 わが妻の薺つみ來しいづこより

梅 土器の酒筵にころげ梅に酔ふ

五月雨 筑波山見えす五月雨今日もかな

秋晴 棉の實の白くほゞけて秋晴るゝ

大晦日 借り貸もなくて永かり大晦日

徳島 高井 北杜

さむさ かりこみし柎にそふさむさかな

かるた 繪羽織のうしろにはねしうたかるた

朴落葉 魚のごと朴の落葉の水くぐる

涼し 神樂囃子涼しき水を戀ひわたる

金

魚

くれなるの錦魚は妹になぞらむ

群馬 高橋 紫城

春

季

これよりや赤城牧場馬つつじ

夏

季

雪溪を前に草津の祭かな

夏

季

戀々と物想ひ居ぬ夜の瑞居

秋

季

國境に近き大河や鮭のぼる

冬

季

沖鳴りの聞ゆる氷下魚釣りゐたり

東京 高野 桂花

春

(新年)

我がみいづの彌榮を祝く五彩かな

春

(春の星)

春淺き夕べや仰ぐ星の列

春

(梅)

冬至梅笑む學び合や春淺し

春

(梅)

梅だより出づれば偲ぶ多摩の里

秋

(仔猫)

小春日の日さし追ひつゝ仔猫かな

東京 高橋 幽谷

春

春

夏

夏

轟々と雪解の鳴る川原かな

苗代のそよりともせず稗の揺れ

峠越す馬にいたわる清水かな

避暑人を出迎へて居り山の驛

奈良 高畑 青邨

石段に今朝生れ出でし蟬のゐる

老鶯やパスの過ぎ行く雑木山

鹿寄や馬酔木こぼるゝ淺茅ヶ原

信貴生駒へ蜂のつゞくや夏霞

返ゆる夜の雪崩聞ゆる雪話かな

春暖や二三羽鳥の鳴いてゆく

東京 高木 柳志

夕

立

夕立の晴れて尊し富士の峯

秋 道哲の鐘も淋しく秋暮るゝ
紅葉 小原女の戻り道なり夕紅葉
返り咲 忘れられし古木なりしが返り咲き

東京 武石 霞 北

水郷の月に更けたり鳴く千馬
高原や芒ほうけて風強し
風の堤いそぐや月の中
秋たけて仁王に積る埃かな

山口 武内 晩 穂

春 藪ひらく土の匂ひや梅の花
春 山の温泉に来て飯うまし木の芽晴
秋 ぬきんでて向日葵のあり罌雲
冬 蟲過ぎて山は障子に青き月
音たてゝ夕日の丘の落葉かな

萩 同 落 霜 時
萩 葉 雨

秋田 田口 風 湫
咲き初めし萩叢あたりもつれ蝶
末枯れし萩叢わたる夜風かな
掃き終へし庭に落葉の三つ五つ
霜とけて日向に動く蠅の影
茹栗を食べつゝ雲聞く日かな

新潟 田野 水草

草の實 草餅 笹鳴雁 初雁 暖

澄んで來し風に野草は實をこぼす
晴着の兒が草餅をくれに來る
井戸端の冷たき露や笹子鳴く
初雁の月や葉あらぬ木木の風
暖や亂れし髪のかゆくなり

東京 田中 東 輔

秋障子 屋根の上雨にぬれたる秋障子

夕涼し 夕涼し二階の讀書見て通る

夏雲 夏雲や小さき山をながめぬる

花野 病院を出でしばらく花野かな

名古屋 田中 静雲

菜の花 ひやゝかに朝の香りの花菜かな

秋暑し 秋暑しほこりためたる道の艸

秋晴 秋晴や日ほてりのする艸の道

コスモス コスモスのつめたくてらう朝の晴

露 朝照りの穂艸に露のまぶしかり

浦和 田邊美土里

カーネーション ヨン カーネーション造花の如く日は過ぎつ

草市 パジャマの子連れしマダムヤ草の市

雁來紅 葉鶏頭紺屋の塀の川に沿ふ

鳥渡る 鳥渡る音の並木に馬馴らす

みぞれ みぞれ中鶯笛をあきなへる

初鏡 いつしかに陽さす障子や初鏡

春の夜 ネオンの灯春の月夜を奪ひけり

夜業 夜業の灯大き機械のその奥に

山口 玉井 萍人

萩 萩叢にすく陽のありて蝶まみれ

椿 サンルームさんくの陽や紅椿

大阪 丹澤 一舟

秋 故郷のぶどうの畠や秋戀し

同 夕暮にはぐれて雁の鳴き渡り

同 夕映や紫紺の空に赤き柿

同 暗き灯に山雀藝す夜店かな

同 蜘蛛の巣に蜻蛉かゝりて秋ぞゆく

新潟 忠 忠 榮

刈田 水艸の花冷やかに刈田暮る

冬近し 嶮々の岨さやかに見ゆれ冬に入る

冬 枯木原風くらみゆくは雪ならむ

雪晴 杉の秀の雪晴れ空にくつきりと

冬山 雪誘ふ黒雲渡る冬の山

千葉 椿 浪 波

夏 佐渡近く飛魚おどり風涼し

冬 雁音が身にしむ今朝の寒哉

秋 出水に急ぎ稻刈る水の郷

秋田 辻 三丈子

雲の蜂 雲の峰工場のとろのつづきけり

かなく 曉の夢にかなく鳴いたよな

とんぼう 茜さす田よとんぼうのみだれ飛ぶ

柳散る 學童のひけて柳の散つてゐる

初便り 鮓漬の禮書添て初便り

濱松 土屋 春波

懸 踊 おもむろに撥かまへたり懸踊

同 緋のたすきもんどりうてる懸踊

同 懸踊玉なす汗をふらしつゝ

水澄 水澄吹き返されてさからはず

灌佛 灌佛を仰いで杓を待ちにけり

香川 寺村 一葉

鳴子 病間のつれづれに鳴子曳いてみる

野菊 道もせにあふれて野菊どこまでも

同 病室の花瓶に野菊あふれ咲く

虫 なきしきる虫音に闇の深かれと

秋晴 秋晴の空より百舌の聲落ちぬ

秋晴 秋晴の湖に投網の巧なる

蜻蛉 大空の青さよあきつ流れあふ
秋の蝶 秋の蝶草にしづもり翅をたむ

香川 寺村 公魚

除隊 除隊待つ稲架る朝の妻若き

栗拾ひきのふのけふをまた來つる

露の穂に朝の露を見てたのし

火鉢 錫焼いて火鉢たのしき夜となしぬ

秋晴 秋晴の煙幕低く山に線

同 秋晴や爆音高く嶺を出でぬ

同 坂鳥や送電線に秋晴るゝ

花畑 遠雷に花圃の花色雨を待つ

松山 出本 長風

同 秋 古里の今宵の月はあきらけく
ひたくと月の湖満ちて來ぬ

夏 春 冬

古里の人に交りて夕涼み
花の下田樂茶屋のはやり居る
朝寒や缺かすことなき宮詣で

新潟 寺尾 岐多路

(三菱南澤嶺山)

冬 夏 春 同

吉野村稻まだ積みて雪降り
菊の葉に蜘蛛かゝりゐて露涼し
水垢の吹き寄せられし苗代かな
奔流や辛夷の續き風光る
菊ゆする嵐となりて黄昏るゝ

大阪 寺井 竹邸

夏の夜の縁にこぼれしビールかな
風鈴や庭木は風にそよぎゐる
家トマトやうやく一つ赤くなり

河骨や何處から湧くか水の来る
うどん屋へ夜學の歸り急ぐなり

兵庫 土井 更衣

春の潮海門に月の浮ぶなり

木の芽ちぬの海眞下に風げる木の芽かな

夕立去つて静まりがたき藪平

月明し木と生ひまじり竹のある

櫺紅葉風に揉まるゝ雑木原

朝鮮 十川日朗子

秋出水 總督も長靴つけて水見舞

同 秋出水避難の船の着きにけり

雞頭 草庵やとりまく垣根雞頭花

夜長 ときれく砧の音の夜長かな

良夜 赴戦湖の鐘の如き良夜かな

東京 土岐 羽扇

若葉 曉け動く若葉の下の土の冷え

夕立 夕立や堰押し切つて水の音

辛夷 駒鳥の音く裏山や辛夷咲く

春夜 春の夜撞球の滑りも鮮かに

立秋 かなくの松の葉末に秋立ちぬ

山梨 富永 柳星

(祖母五十三回忌墓参)

秋セル セルの人香華の煙浴びにけり

秋雨 秋霖や乾シ藁仕舞ふ小提灯

秋刀魚 秋刀魚焼いて生活うれしき山住ひ

躑躅 咲き萎えて躑躅艶あり雨後の庭

(病臥)

春惜む 惜春の火鉢一ツに薬瓶

埼玉 戸張 錦秋

(新年)元日 元日や猫と戯る日南の子

(夏)睡蓮 睡蓮にかよめる僧のうら若き

(夏)浴衣 浴衣着てつゆの芝生を一めぐり

(秋)刈田 日の暮れて鶯の群れゐる刈田哉

(冬)雪 雪搔ける柚の童の頬かむり

落水 水落す音高まりて黄昏るゝ

廣島 豊枝 一波

芽柳 芽柳やかすかに濁る町の空

春雨 野を焼きし跡の黒さや春雨

草若葉 塀の根にすらりと並び草若葉

炎天 炎天や物皆の影ちよこまり

朝鮮 東島 白舟

春 風そよぐ艸に憩へば春しるき

春風 春風や高鳴りきゝて部屋籠り

夏空 空暗み葉鳴り劇しき夏一日

夜燈 燈のゆれて夜長の更けの静かなる

百舌鳥 野立木の梢の百舌鳥や秋うらゝ

清水 内藤 静蛙

初鵜 砂濱の船のへさきの初鵜

冬田 藪道をぬけて冬田や暈の月

春雪 つれくの身に今日も降る春の雪

春の雪 富士晴れぬ防風林の蟬時雨

蟬時雨 柿の實をあほげば雲の渡り行く

旭川 中矢 城雪

柿 旭川 中矢 城雪

隴ろ いさり火見えて島のあたりはおぼろかな

紅葉 照紅葉ダムさむくと白きかな

冬至 冬至晴ひととせの反古やき捨てつ

冬 田 道青 艸もまじるところあり
 寒 燈に影ひいて車夫の我を呼ぶ
 笹 鳴の垣根にバスを待ちあぐむ
 凍 る 朝焼けに凍てし下駄はく我なりき
 北 風 もの戀ふる身を朔風にさらしけり

滋賀 中谷 芳秋

雪 楹 榊の雪に暮れ行く寺泊り
 夜 食 家風呂の落湯聞ゆる夜食かな
 柳 散る 城濠のとぼしき水や柳散る
 吊し柿 軒端打つ時雨となりぬ吊し柿
 桐一葉 桐一葉かさりと落ちて日の暮るゝ

徳島 中川 行人

春 胃袋重しニン月の雲遠く
 同 海月のいのち二月の水に運ばるる

同 同 夏

笛ふけば魔が来ると云ふ夜の春
 子のあつきねいき春夜のわが胸に
 むつつりと若葉のかげのすえもの師

松本 中島 晴陽

十三夜
 落葉
 稻扱
 刈田
 後の月

雪にあひいつか伸びたる麥芽かな
 子を守りて戸口の月に立ちにけり
 刈り伏せて稻ひろくと十三夜
 葉の落ちてぞくく蔦の實熟れたり
 稻扱機ごうくと田のうららかに
 あまたゐて小蛙のとぶ刈田かな
 更けるほど寒う大きく後の月

大阪 中西 紅笙

鴟
 秋日和

夕焼のこがせる屋根や鴟の聲
 音残して過ぎし列車や秋日和

栗 焼けてゆく栗甘き香をはきにけり
蚊 遺 蚊遣香焚けば風ある部屋の中
月 涼 し 月涼し水の香流れ来る座敷

長崎 長野 天星

冬の月 枯芦の上に澄みけり冬の月
冬の海 漁火見えて果なき闇や冬の海
落葉 日溜りの落葉に憩ひ海を見る
同 葉 落葉道わが影長く踏み下る
頭巾 耳遠き故にはあらぬ頭巾哉

釧路 長内 風舟

雪 解 日溜りに遊ぶ雑雑や雪解くる
祭 子 は 子 は 祭 の 店 に 吸 は れ け り
蟲 鳴 く や ラ ン プ 吊 つ て 獨 り 湯 浴 み す る
鯉 風 洲 艸 に 砂 の 飛 ん で く る

冬めく 冬めくや樵移りて住む山の小屋

東京 永濱 詠吉

初鶏や雪の田中の一ト構
花の雨不連続線發達し
誘ふ水あればや萍ただよへる
丸ピルの窓々月の反射して
吹く中を陽に耀ひつ楸散る

福島 西田 鯉淵

凍返る 凍て死にし子兎はふる夕づくに
苗とればひるへらくと泳ぎよる
月かげの音なくくたく岸ありく
同 月 す み て 櫓 音 か す け き 湖 の 面
師 走 き ね の 音 揃 ふ 師 走 の 星 夜 かな

京都 西垣 棠雨

草 萌 風買ふて足る童心よ草萌ゆる
 七夕や五人子持ちて皆をみな
 櫻落葉 雀二三櫻落葉に戯むる
 冬木 雀とぶ羽音したしや夕冬木
 餅花 土間廣く餅花影を投げ交す
 若葉 燈む朝の陽さし明るき若葉かな
 初夏 一むらの白雲わきし初夏のひる
 夜長 背のびして猫の鳴きよる夜長かな
 コスモス 雲の流れ早ふコスモス亂れけり
 麦の芽 麦の芽や部屋つゝぬけの丘晴る
 津 西井 翠石
 新年 立石やしめも新たに初日出
 春 雲雀なく土手の日向に草枕

富山 西野 六朗

夏 翡翠やあしの小川のゆきもどり
 秋 紅葉さゆ瀧のみなかみ池は澄む
 冬 風舟やる浪にかいつむり
 北海道 丹羽 峭峰
 餘花 うらぶれて見上げる餘花に暮れせまる
 新樹 白壁に映ゆる新樹や朝日影
 夕焼 のらに聞くサイレン遠く夕焼けて
 秋の暮 丘越ゆる人影長き秋の暮
 夏 騒や沼邊を一人あるきけり
 兵庫 新田 かんじ
 芒 海の雲見つゝ芒にふれもする
 芒 夕芒穂先のまじる野水かな
 茗荷の花 雨後の茗荷の花がほのにほふ
 流星 ながれ星千蛸が影を濃く曳けり

蜥

蟻

めぐりきてとかげの土くれかきならし

大阪 新田 沙鷗

新

年

けさもさむき松に鶴なく初詣

春

夏

霽れてゆく春の山から杉雪

秋

冬

蛭捕りの石上ぐ手より水しづく

冬

秋

生枯れの葉に躬をつゝみ蓑蟲や

冬

秋

干菜 風炭ほぐ埃ちかくより

石川 新田 雨人

新

年

お降りやぬれて着きたる鶴の餌

春

夏

蓮如忌にあひて泊りを長うせり

夏

秋

籬には白き花 咲き 明 易き

冬

秋

杉の樹も鳴くよと見ゆる夕かなかな

ガラ ス戸に月へばりつく夜風
愛媛 野本 思愁

春

同

同

夏

冬

秋

同

水仙に灯りて蠅の見ゆるあり
夕 鴨や木の葉に雨のひかりつつ
鳴たける川への道の黄いろい葉
障子 はる窓の夕日の秋深き
山茶花や雲たかく焼けてしまいぬ

秋田 野中 草杖

小 蒸 氣 の 棧 橋 近 し 猫 柳

折れ伏しし枯蓮を東風渡りけり

親一人子一人の雛祭りけり

土 運 ぶ 人 夫 裸 や 縣 工 事

峯 高 く 道 一 筋 や 冬 木 立

丹波 野村 緑 月

すかし見ゆ茶の木の花や十三夜

おちつづく柿の葉ごしの後の月

同 同 同 日

枯豆を風吹きならす十三夜
豆食へば大鼓鳴るなり秋祭
遠山のひだ明らかにかに秋入日
紅葉散る日なたのむしろ猫ねむる
茶の花にほのかに白し夕月夜

神戸 橋本 赤道

歸 雁

蹊ひらに大地ぬくみて雁歸る

睡 蓮

睡蓮や葉裏をつゞく魚の居て

蝶 衣 忌

燕去ぬ淋しさ重ぬ蝶衣の忌

寒 菊

菊作りし父を繼ぐ者なかりけり

寒 林

寒林にかゝりし月の揺れやます

東京 橋本 舞城

同 秋

草原に角力取る兒や赤トンボ
山澄むや野をかけ廻る親子馬

同 冬

夕月夜鹿の聲きく宿につく
木枯をまともに耐ゆる大樹かな
初富士に祝賀編隊飛行かな

東京 橋本 秋更

踏 青

今は亡き人など思ひ青き踏む

霞

手にふれし艸あたゝかき霞かな

肌 寒

肌寒や風吹けば飛ぶ樺の葉

落 葉

吹くごとに音たてゝ散るブラクナス

白 露

桐の實のいつまで青き白露かな

静岡 長谷川 静逸

鴉

鴉の聲大空にまでしみわたる

蚊帳名残

淋しさの身にしむ宵や蚊帳名残

雲

櫻木の肌つややかに雲ふる

夕 立

夕立の過ぎたる樹々を風わたる

ポブラの葉そよぐ舗道をセルをきて

大阪 長谷 素仙

新年 屠蘇の容だんく酔ふて唄ひけり

春 春宵や歌舞伎に泣いてひのまぶく

夏 裸の子臂をたゝいてさしあげぬ

秋 花萩の伏したる谷や水鳴りて

冬 みあかしの佛眼にある寒夜かな

新潟 林野 鷺城

春 深し 用水の道にあふれて春深し

卯の花腐し 濁江に卯の花くたしかかるなり

菖蒲 野の水は菖蒲のもとに分れけり

短夜 いちじくの實の太りけり夜の短

渡り鳥 湖見ゆる疎林の徑や渡り鳥

大阪 久下 亦春

新年

初日の出勤かぬ御代の姿なる

春 獨活掘れば日のたけて畑しづかなり

夏 曉を急ぐに聲す麥刈るや

秋 さしばらの秋芽にふはと赤とんぼ

冬 まきたばを積みしあたりは冬日南

岡山 人見雨衫子

冬の雁 乾きそこねし足袋に觸れ見つ冬の雁

雪 降る程の雪吸ふ土の黒さかな

冬 木 録のよな月が今落つ冬木哉

一茶忌 や黄菊折る手に泪しぬ

倉敷 平松 溪泉

冬 山茶花に住みてかほそき生活哉

冬 水仙に晴れ渡る日や艸の宿

夏 たゝずめば河鹿鳴きつる早瀬かな

同 秋

山住みのわびしきものに夕立かな
秋晴れやとく起き出でて艸を刈る

廣島 平田 耕基

春愁や鬨志抱いて丘に立

山宿や何にはなくとも時鳥

朝霧を打ちぬけて來る木魚哉

更生を自誓の酒や松の内

つくねんと待つ夜の月の淋しかり

滋賀 平尾 螢草

爆音にゆれるか梢の梅青葉

薫風や茶摘の歌のおちこちに

山口 廣津 臥月

ひき捨てし菊に小蜂の來て居りぬ

満潮の篋打つ大根洗ひけり

菊 大根洗ふ

青葉 薫風

柿 芒 稻 雀

落柿の草刈る録にさゝりけり

嫁の灯の芒の風に吹かれゆく

稻雀おりんとするを追はれけり

福井 深田 白葉

静けさや月夜の道をバスの行く

行水のうしろ笥の水の音

炎天にうなだれて咲くグリヤかな

群馬 深澤 花影

みりくと氷張る夜や野路行く

朝日さして艸家の雪のはるけしき

春に似しひと日ふた日や笹子鳴く

横濱 福島 あさみ

髪あらふ夜ぎりの中の虫時雨

行く秋を芒が中に惜みけり

水 雪 笹子鳴く

秋雨やまがきもれ来る聲高し
憎愛の心失せて春の風
梅雨晴や夕虹かゝるピルの上

兵庫 藤原紫陽花

新年

美しき瞳にのぼる初日かな
松の花散らし響きぬ巨き鐘

薫風や高原白き牛放つ

菩提子を拾ふや力田の鶴林寺

賢し子の錢拾ひ來し齋摘み

山口 藤井 静紀

秋

冷やかや宵の板橋誰かくる

同

冷やかや山間のみち露の乾す

同

櫻紅葉庭をうづめて峠茶屋

富山 船藤 羊越 昌

寒

停電も暗をにらめし寒さかな

長

大工小屋より煙ののぼるのどかさよ

時

時雨るゝや家中暗き煙哉

櫻

座に附いて茶について來し櫻餅

冬

冬日南松笠落ちてゐる廣場

神戸 堀内 翠 雨

夏(紫陽花)

紫陽花に草の雨くる眞晝かな

夏(花棕櫚)

棕櫚の花しかと日にありこぼれめや

秋(流星)

流星や我のみが知る東の間を

同(天の川)

天の川更け行くほどにしたたりぬ

同(花野)

御佛と我と暮れゆく花野かな

北海道 前田 含水

日

蝶ひらく森の泉の静けさに

蝕

南風妖しく白夜の中に草震ふ

石狩野全く暮れて鳴る風鈴
夜業の灯大きく揺れて我が影も
こよなくも晴れて木の實の弾けゐる

布哇 前原 一星

暖國の雲の動きや五月空

夏めくやレッファに注ぐ雨の色

日本の人と知れたる扇か那

雲さがる方へ野牛や草絶ゆる

アドワ途に陥つてふ日なり稻妻す

岡山 侍留 青丘

庭掃けばいく度か霧の流れ來ぬ

薬草は軒にからびて秋の行く

夜業の灯もれ來る闇の深さ哉

藤の實や夕陽に黄葉の舞ひ上る

夏 同 同 同 同
霧 行く 秋
夜 業 藤
の 實

春 隣

またゝきや春を隣れる星ひとつ

千葉 松浦 一吼

蜻蛉

照り強き日中の蜻蛉草にあり

秋燈下

こぼろぎの鳴きつぐあはれ秋燈下

落葉

松杉の中の雑木は落葉して

冬雲

日一線冬雲ぬけて蒼き海

風邪

風邪の子やいとしも子等にはだかりて

千葉 松浦ふさ女

菊

勝菊のその一と本の影も濃く

踏青

踏青や木かけに入れば眼の暗く

河豚

沙濱や河豚ころくと乾きゐる

焚火

つぎくに焚火を海女のはなれゆく

針供養

針供養しまだに結ふてみたりけり

清水 増田 西嶽

新年

春

夏

秋

冬

書初めに子の這ひ來り手を觸れし

長靴履いて田螺を拾ふ女かな

裸人大樹の下に墓碑刻む

恩給の隣同志や鯊を釣る

茶の花や山の窪地に池一つ

岐阜 丸山 畹人

春の雨

清の水

月見草

天の川

コスモス

土に居て蛙鳴きけり春の雨

登り來て清水掬ふや深嵐

雨となる宵しづもりぬ月見草

せゝらぎの音に更けゆく天の川

コスモスや雲限りなく流れゆく

兵庫 丸尾 一伸

春

夏

花巡り山は奥あるけしきにて

淋しさや材木拾ふ男達

冬

同

同

同

枯野

鷓鴣

もがり笛

郭公

麥

苔の青さ少し見えぬる落葉かな

有難く焚火の小屋の端に居る

時雨れるや垣にダリヤの無茶苦茶に

大分 三重野 素月

野の枯れて目つむりがちな牛どもか

山はただだいでいゝ色に鷓鴣棲む

煙突の火の子しきりにもがり笛

郭公や谿の深きを知る蓍

麥埃り流して胸毛ふかれぬる

長崎 南野 浪歌

夏

秋

同

冬

初蟬や茂り見越しに雲の峰

落葉樹の岩の根に咲く石菫の花

鴉來て郁子の高さよ楠大樹

ふうはりと禪木につのる雲かな

同

玉子酒や今宵雪らしひ寒の空

岩手 南谷 尖浪

花

脂粉の香ただよふ花も三分にて

牡丹

草茂り灯せば虫の飛ぶ音す

蛩

露含む牡丹の朱唇むしばまれ

凍

流れ蛩くさに縫りて息しげき

て

メスうごく今しわが魂凍つらむか

栃木 皆川 稚翠

露

丈に伸び露しとよなる葎かな

月

もろこしの高影月を上げ居りぬ

冬木立

枯木明りほのくぬく障子張る

雪

枯艸に雪降るけはいあたゝかき

凍てる

壁一重凍てのきびしき夜なるかな

大阪 宮澤 里人

梅 同 春の蝶々 秋の菊 秋の海

起伏せる丘々に見ゆ梅の花
梅の宿大楯とろと燃えてあり
春の水ニ夕瀬となりてゆるやかに
濡れ柴の乾く匂ひや蝶の飛ぶ
芋の葉の葉摺れさやかに秋の風
剪り惜しみ香に浸りつゝ菊の中
夕映の渚あかるき秋の海

長野 宮部 舟水郎

春 夏 秋 冬 新

ハイキング春曉の雲はるゝ
波よけの杭越す浪や大南風
川ぎりの吹きこむ舟の世帯かな
黄昏れは時雨るゝくせや奥信濃
氣の合ひし仲間同志や山初め

神奈川 宮前 松月

蓮 水鏡に染まぬ白さや蓮の花
 セル 闇に咲く乙女やセルの派手姿
 衣更へ 樟腦の香にむせびけり衣更へ
 菖 薄 花菖蒲池に盛りを映しけり
 藤 藤暮れて小鳥の宿となりけり
 螢 街灯の光に螢のまれけり
 汐干狩 友の籠そつと視くや汐干狩
 白粉花 千葉 宮野石楠子
 一葉 白粉の花に吸はるゝ陽の淡き
 後彼岸 黒みたる一葉や霧のひやゝけき
 秋耕 彼岸團子戴く座敷陽さし居る
 ひやゝけき霧を割くる耕す聲
 老鶯 愛知 村瀬 曉影
 老鶯や茶庭はひそと雨細し

秋の蜂 熟れおちし柿に寄り來つ秋の蜂
 木兎 木兎ひそむ樹のひそけさや明けの月
 草紅葉 山近う晴るゝや雨後の草紅葉
 秋曉 秋曉や蟪蛄おちし部屋の間

栃木 村上 獨風

寒の月空の深みに更けにけり
 あしだにて行く人の有り寒の月
 ひとゝきを雀さえする霧の朝
 初梅の開きてぬくき日和かな

樺太 森 正典

春 一人病む人よ餘寒の林檎むく
 秋 なつかしき校舎に紀念樹若葉せる
 秋 癒えて發つ故郷の月を仰ぎけり
 秋 久に歸へりし故郷うれし今年酒

冬

日々の生活に満ちゐる妻よ暖爐燃ゆ

徳島 森 白山

芍薬

芍薬の照りの白さに瘦せてゐる

風鈴

風ほしき夜の風鈴を買ひに出る

案山子

よき晴れの案山子へ口笛ふいてゆく

彼岸花

彼岸花夕日ふたゝびきて消ゆる

秋落葉

雲がしづかに山越えてゆく秋落葉

富山 森下句朗英

新年

明けそむる初空に高く国旗掲ぐ

青葉

膝の書に青葉の日影映えてすぐ(車中にて)

岩百合

咲き残る岩百合の影澄む水や

野焼

野火遠し子は鶏追ふてよちくと

秋近し

秋近き艸原蝶の湧き出でつ

朝鮮 矢坂 紫光

新年

若水や灯にしらじらと齒朶の霜

春

ほの青き田芹のにほふ春の風

夏

行水の桶の玩具に月が射す

秋

田路ほのと夜霧こめけり稲の花

冬

壁の影更けてひろがる夜の寒さ

三重 矢土 錦 残

秋

ソリ馬によく遊ぶ子よ園は秋

同

砂遊ぶ子等は仲よし秋の蟬

同

灯を消して妻と端居や天の川

同

夕立晴村は涼しく灯りけり

夏

湖の見えて涼しき夏木立

三重 矢土 英 城

夏

箱庭の四五本なれど夏木立

秋

汽車たちて淋しき驛の虫しぐれ

同 兩の手に水桶さげて島の秋
同 虫賣の灯や小くらがりビルの闇
同 月の出を夕餉の窓に眺めけり

東京 山口 芳泉

元日 我が掌薄く見し元日の夜の炭火
春曉の牛乳屋がながす街の唄
南風の果樹が匂はす晝の夢
扇捨つるや芭蕉を襲ふ夜の冷氣
枯菊 灣日和こゝの菊みな枯れたれど

茨城 山田 十暮

春 ふと見れば日永の雲の去らずあり
夏 桐青葉かそけく月の映り曇り
秋 生命かなし草に夜を透く虫の聲
冬 しるぐの月の冴え見ゆる圍爐裡かな

新年 凍て鳴りの續くこの日やお元日

長野 山岸 松想

初明 鶏謳ふ雪の軒端の初明り
種蒔くや畔の柳も影なしして
青嵐山を下りて野は廣し
豊の秋醇厚俗をなせる里
冬がれ 雲低く、山を離れず冬かる、

兵庫 矢野 貞衣

春 春めきし裏山筋や百千鳥
夏 青空につゞく山肌梨の花
同 野茨の花真白にて夏の月
秋 晴れや粟穂にゆる、群雀
冬 燠ぶれる靄に霜ある今朝の風

徳島 湯浅美草女

草の實　みこし草實のはぜゐるや深き露
 小春　高らかに鶯の鳴きゐる小春かな
 芹　洗はるる芹青々と波よする
 餘寒　水吸めば餘寒の月の照りこみぬ
 木の芽　山の道木の芽匂ひて明るけれ
 今朝の冬　東京　横倉　愛山
 畦草の日々を細りつ今朝の冬
 枯野　風移る音かすれ去る枯野かな
 冬の月　冬の月細く野末のはてに立つ
 日盛　薬賣りの薬匂ふや日の盛り
 花野　夕空の朱ヶ眼に染みぬ花野道
 倉敷　市原　規外
 小春　奥に来て小家を見たり山小春
 盆の月　山人の歸るに逢ひぬ盆の月

夏祭　夏祭水に榊のつけてある
 春日　音さむき瀧ある山の春日哉
 秋山　秋山のはづれ通るに瀧の音
 東京　吉岡　句城
 ちゝろ　蟬のたつた一つが夜もすがら
 柿　道ばたや山芋賣と柿賣と
 放屁虫　放屁虫力いつばい放ちけり
 紅葉　夕紅葉たちまち霧が大霧が
 草の實　草の實の飛ぶやまつたく上天氣
 埼玉　渡邊　石筍
 浅春　春浅く灯にうづくもる家容カウチ
 秋待　秋を待つ臙にすがしも上空の牙え
 鶯　齒磨粉は微風に散れり百舌鳥の聲
 氷柱　曙光の澄みやう氷柱光りそふ

氷 柱 曉月のいるさを光り木の氷柱

秋田 渡邊 臥龍

浅 春 春浅き篠の亂れの野川かな

花 野 立つ風の揺れ騒がしき花野かな

秋 燕 時化あとの磯の香つよし秋燕

炬 火 雪をさく眞晝の炬燵侘しけれ

門 松 山里や静もるまゝの門の松

秋田 渡邊 五秋

花 草 花の山奥に細道ありやなし

夏 草 夏草に臥手とも見し巨石かな

秋 深 影つくるもの皆瘦せて秋深し

焚 火 裏口にかりそめに焚く焚火かな

初 東 風 初東風や竈の口を吹き出る火

大垣 和田 岐泉

木 の 芽 枯蔓の巻きしまゝ吹く木の芽かな

山 吹 山吹に貨車の通れる地揺かな

浮 巢 麥舟の通りて浮巢揺れにけり

夏 朝 夏の朝靄より赤き日の上る

秋 暮 川の舟の苦より煙秋の暮

課題吟秀吟

「夏騒」

松村巨湫先生選

三光

天

夏騒や浦曲海光しんとある

徳島白山

地

夏騒や杉生なだりの蔦の枯れ

金澤鐵沙

人

夏騒の鈴懸皮をぬぎにけり

東京明々

八客

いたどりのいぶきにむせよ夏木騒

東京潤木

照りかすむ端山の葉騒眞白なる

越後忠榮

| | |
|----------------|-------|
| 明りして蔵に味喰つく夏夜騒 | 度南胡頹子 |
| 燈消して夏騒の香と寝ねにけり | 羽後晴湖 |
| 夏騒や大樹の下へ生葉降る | 東京藤花 |
| 夏騒の夜に入り蟲の燈に群れつ | 東京孤村 |
| 望樓に夏騒感じひとりゐる | 樺太夢人 |
| 夏夜騒道の干艸ふみてゆく | 上川三艶 |

十客

| | |
|---------------|-------|
| 夏騒の樹海を吹て光りけり | 大阪里人 |
| 夏騒や大葉かさなる水の露 | 直方旬雨 |
| 夏騒や艸山深く人見ゆる | 青森無爲 |
| 夏夜騒けふも汗して母の坐す | 安藝鯉軒 |
| 夏騒や白鷺ひたにをちをとぶ | 武蔵きよし |
| 夏騒や一望の畠干瓢干す | 下野稚翠 |
| 夏騒やひねもす匂ふ干蛹 | 武蔵愛山 |

課題吟秀吟

八七

夏騒や五位しきり啼く晝の藪 東京 桂 夏
夏騒の月夜となりぬ畑のみち 周防 黎明 城
夏騒や日にく太る畑のもの 横須賀 清閑 人

入選

夏騒や艸のあざみの丈あはれ 金澤 鐵 沙
夏騒の人を跳ねとぶ小蝦かな 東京 明 々
若竹の葉騒すがしく夏月夜 越後 忠 榮
夏騒や蘆生ふ岸に澄ぎゐる 東京 胡 頹 子
夏夜騒空に飛ぶ星音やある 東京 藤 花
夏騒やバスの音のたゞあはたゞし 同 同
夏木騒丈艸扱いで湖に消ゆ 南慶 孤 村
夏騒や悠忽として鳥かける 上田 三 艶
夏騒やさりかに樓める水を覗る 青森 無 爲

註 退塾は津輕の山深きところの溪流にすむ、形、味ひ共に蝦に似る。

夏騒のひねもす岡になりやます 武藏 きよし
蠶飼屋に繭を擴げぬ夏夜騒 武藏 愛 山
夏騒の月夜となりぬ畑のみち 周防 黎明 城
植込みの息づくけはひ夏夜騒 横須賀 清閑 人
夏騒に曉くれば知多は潮ぐもり 伊勢 錦 残
夏騒や戸隠の徑雨あびて 東京 紀 元
夏騒や雨となる夜の寝苦しき 越後 溪 月
夏騒や蚤の屋めくる蘆のゆれ 大阪 香 路
夏騒や森つきぬけて野へ出でし 大阪 月 秋
夏騒や登りつむれば海あをし 名古屋 赤 汀
夏騒や巽風あふりの暗の森 東京 羽 扇
夏騒や病室にきく風の音 東京 柳 志
夏騒や銀杏青葉を濡らす月 三河 壽 光
夏騒の昏れて露呼ぶ草おどる 京都 虹 華

怒濤なすボブラ並木の葉騒かな
 阿波江
 夏騒に覺むれば月の出づるあり
 阿波耕
 夏騒や星きらめける崖の見ゆ
 大阪紫
 夏騒に庭樹の空は瑠璃深む
 越後杏
 桑畑に入る道白し夏葉騒
 東京草
 夏騒や星の明るき木となりぬ
 東京秋
 夏騒や星ふらんばかりの蘆の道
 東京茶
 夏騒や葉洩るゝ日影地ににじむ
 大宮源
 夏騒の庭樹々に陽の豊かなる
 甲斐柳
 夏騒を甲斐の山々濃く聳てる
 信濃弧
 間に來て水音交りや夏葉騒
 東京愛
 夏騒の木洩日にじむ樺の肌
 信濃芳
 夏騒や人影の地に炎ん行きぬ
 尾道荔
 夏騒や大きな巖登山に立ちにけり
 同蒞

夏騒や野にも里にも青み匂ふ
 大阪亦
 まぜ強し濤よするごと夏木騒
 同同
 夏騒や目高の影や砂走る
 阿波杜
 雲たゞに輝いてゐる葉騒かな
 同同
 夏騒や小川へ馬を引き入るゝ
 東京あ
 夏騒にそれきりとなる日照かな
 茨城義
 夏騒やからり晴れたる峽の空
 熊谷蚕
 はらくと雨降り過ぎぬ青葉騒
 同同
 夏夜騒の音に目覺めて月あかり
 登岐國浪
 夏さるや若葉の谷の底ひより
 東京景
 夏騒や楽しき道をひろひゆく
 東京東
 重たげな雨くる夏の夜騒かな
 武蔵錦
 山復の權現堂に來て葉騒かな
 三條市礫
 夏葉騒露をおびたる月の影
 丹波祿

課題吟秀吟

| | |
|-------------------------------|-----------|
| 夏 騒 の 静 け さ や ぶ る 宮 の 城 | 名古屋 浩 三 |
| 夏 騒 や 蟬 啼 き し き る ひ も す が ら | 大垣 岐 泉 |
| 夏 騒 や 稻 の 葉 裏 の 光 り を り | 淡路 晃 緑 |
| 夏 騒 や 曉 の 山 ひ と り 行 く | 鶴岡 京 |
| 夏 騒 や ほ の ぬ る き 風 が 吹 い て 來 る | 但馬國 眞 紗 琉 |
| 夏 騒 や 灼 く る 木 肌 を 降 る 蟻 | 周防 巨 瀑 |
| 暑 き 日 を 森 の 葉 騒 と 暮 し け り | 伊勢 翠 石 |
| 夏 騒 や 湖 畔 に キ ャ ン プ の 影 涼 し | 駿河 秀 芭 |
| 温泉 疲 れ を 葉 騒 の 一 夜 か こ ち け り | 宇部 龍 谷 |

(俳句往來再録)

現代新進俳句集作者住所録

一、住所録は五十音順によつて配例した。

一、「氏名」、「所屬」、「住所」、「作品掲載頁」の順である。

一、所屬は個人に師事、及二三に據るものはその一を記し、他は略した。獨習獨學者は單に無とした。よつてこれを参考として作品を鑑賞すれば亦得る所多いと思ふ。

一、凡べて昭和十一年十二月現在である。

一、本録は亦作品索引を兼ねるものである。

ア

相川 天 民 () 千葉縣香取郡高岡村……………二

秋田 すみれめ (稻本社同人) 大版市北區堂島北町三三三……………二

淺野 一 青 (麒麟草師) 滿洲國錦州大馬路二丁目……………二

足立 露 艸 (雁 來 紅) 兵庫縣朝來郡生野町銀谷五二一……………三

現代新進俳句集作者住所録

天野光風() 北海道十勝國西足寄村……………三

荒川七樹園() 秋田縣五城目町……………四

荒川晴湖() 秋田縣五城目町……………四

池田柞葉(あけび) 東京市瀧の野川區田端町五〇〇松村方……………五

石井淡流(槐紅同人) 茨城縣石岡町平等寺……………五

石川凡字(石楠) 東京市向島區寺島町八ノ六四……………五

石原沙人(石楠) 奉天紅葉町一六ノ三……………六

石野瓦卜(同人) 上海平涼路公大第一廠……………六

稻垣法城子(三河) 愛知縣幡豆郡平坂町中畑高須方……………七

稻垣佛座草() 三重縣員辨郡阿下喜町……………七

猪羽北峰(巨湫師) 大阪府三島郡高槻町上田部……………八

榎本一艸(無) 大阪府東成區林寺町三一九ヒシヤ方……………八

伊東藤花(石楠) 東京市王子區稻付西町六ノ四四……………九

市原悠々(無) 熊本縣阿蘇郡坂梨村八九五……………九

今村溪水() 福岡縣大牟田市魚町……………九

岩倉玉兔(石楠) 德島縣鷺敷町……………一〇

工富けんじ() 岐阜市外加納町長刀堀四ノ五七……………一〇

岡村桂夏(杜鮮齋) 東京市城東區大島町三ノ一六四……………一一

荻本ム弓(亞浪師) 南滿洲海城陸軍病院……………一一

表鶴城() 石川縣鹿島郡熊木村……………一二

大島錦溪(あけび) 大阪府中河内郡繩手村河内……………一二

大塚竹蕨子(あけび) 栃木縣那須郡西郷村……………一二

大森葦山(巨湫師) 熊谷市本町四……………一三

大場望海() 愛知縣寶飯郡蒲郡町牧山……………一三

大田窓芳() 愛知縣龜崎町……………一四

大林芳綾() 香川縣綾歌郡羽床村……………一四

小笠原皓隼(稻木社同人) 兵庫縣川邊郡新伊丹梅木町二ノ七二四……………一五

小笠原華童女(稻木社同人) 右 同……………一五

小川俳洗子(若水會)新潟縣北蒲原郡乙村地福院……………二六
 小野田典史() 静岡市上分土……………二六
 小笠原穂洲(石鳥同人)……………二七

カ

加々谷史洲(靜薫師)秋田縣新屋町……………二七
 勝又桔梗子(すその同人)静岡縣御殿場町二牧橋……………二七
 葛西朗風(時雨)北海道野塚局區内……………二八
 金田露香(石楠)神奈川縣茅ヶ崎町上高砂……………二九
 金谷源太郎(巨湫師)埼玉縣大宮町大字一〇八二……………二九
 河合白雲(あけび)尾崎市北初島町二……………二九
 川村去秋() 高知縣幡多郡田口村……………三〇
 川端健甫(懸葵)石川縣鳳至郡宇出津町……………三〇
 柄澤壽井泉() 長野縣上水内郡神郷村……………三一
 岸田豊晴(東炎)東京市品川區大井關ヶ原一二九八佐藤方……………三一

木村愁人() 神戸市松屋町二八ノ三五……………三三
 北村歌仙() 北海道空知郡富良野町佐藤方……………三三
 桑原茶京子(あけび)東京市品川區大井關ヶ原一二九八佐藤方……………三三
 小池赤汀(石楠)名古屋市中區鶴羽町三ノ一……………三三
 小島景信(巨湫師)東京市四谷區永住町二……………三三
 兒島紫竹(無) 大阪市住吉區王子町一ノ二一……………三四
 小林雲路() 秋田縣五城目町……………三四
 小林映洋(さへずり)千葉縣印幡郡遠山村十餘……………三五
 小林羅衣(句と評論)東京市淀橋區西大久保二ノ二〇九大竹方……………三五
 近藤郷愁() 長崎縣北松浦郡小値賀村……………三六
 小南薺圃() 東京市荏原區戸越町八六〇……………三六
 小山田靜夜(あけび)岐阜市三番町……………三七
 小山榮峰() 長野縣更級郡眞島村……………三七

サ

- 齋藤潤木(石 楠) 東京市豊島區高田本町二ノ一四八七……………七七
- 齋藤高甫(あけび) 栃木縣下都賀町桑村喜澤……………七六
- 齋藤斗志郎() 静岡縣小笠郡曾我村篠場……………七六
- 酒井 傳() 長野縣伊那町……………七六
- 坂本碧水(石 楠) 愛媛縣南宇和郡平城小學校……………七六
- 坂輪あづま() 東京市板橋區石神井關町二丁目……………七〇
- 坂本式奇() 廣島縣嚴島町……………七〇
- 坂田眞水(稻木社同人) 兵庫縣伊丹町荒堀七二五……………七〇
- 櫻井陽春(巨 湫 師) 大阪府高槻町別所六三……………七〇
- 佐々木秋人(新秋主宰) 秋田市外新屋町綠町……………七〇
- 貞方雪柳(あけび) 長崎縣南松浦郡富江町……………七〇
- 里井虛木(稻木同人) 大阪府中河内郡布施町東足代一五六……………七〇
- 穴戸梨村(石 鳥) 岩手縣東磐井郡小梨村……………七〇
- 信濃眞紗琉(斷 脣) 兵庫縣朝木郡生坐町……………七〇

- 柴田露草() 福岡縣遠賀郡中間町上淺井野……………三三
- 下田白哀(無) 福岡縣山田郡後藤寺警察署……………三三
- 霜 多 俊() 茨城縣北相馬郡守谷町……………三三
- 城野晃綠(巨 湫 師) 兵庫縣津名郡山田村……………三三
- 進藤澄成() 山形市外本澤村夜田……………三三
- 菅沼秀峰(誠 道 社) 静岡縣濱名郡新所……………三三
- 杉澤清閑人(あけび) 横須賀市田浦五八四……………三三
- 杉下青峯() 東京市足立區旭町七四……………三三
- 鈴木慈狼(しげる師) 大阪府大津町上之町一八九……………三七
- 鈴木彦星(松 宇 師) 東京市荒川區尾久町一ノ九四七……………三七
- 鈴木一石() 栃木縣鹽谷郡北高根澤村平田……………三七
- 鈴木巨浪(あけび) 東京市淺草區雷門二ノ十二ノ三……………三七
- 鈴木歌舟(演 人 師) 静岡縣賀茂郡田子村……………三七
- 住吉穀雨(ぬかご同人) 栃木縣河内郡古里村白澤……………三六

夕

| | |
|-----------------------------|----|
| 高井北杜(蝶人師)德島市富田仲野町四 | 三九 |
| 高橋紫城(凍魚師)群馬縣勢多郡富士見村赤城山小暮局區内 | 四〇 |
| 高野桂花(無)東京市板橋區上落合二ノ七九三 | 四〇 |
| 高橋幽谷(無)同淺草區菊屋橋一ノ三ノ三關本方 | 四〇 |
| 高畑青邨(あけび)奈良市寺町 | 四一 |
| 高木柳志(無)東京市澁谷區幡ヶ谷本町三ノ六四二 | 四一 |
| 武石霞北(無)東京市赤坂區新坂町七五 | 四一 |
| 武内晚穂(無)山口縣平生町一六〇 | 四二 |
| 田口風湫(無)秋田縣立角館中學校 | 四二 |
| 田野水草(無)新潟縣西蒲原郡燕町中太田 | 四三 |
| 田中東輔(無)東京市瀧の川區中里町一三四 | 四三 |
| 田中靜雲(あけび)名古屋市南區鳴尾町牛神二二三 | 四四 |
| 田邊美土里(挿雲)埼玉縣浦和市三五九九 | 四四 |

| | |
|-------------------------------|----|
| 玉井萍人(花藻句會)山口縣島地町 | 四五 |
| 丹澤一舟(稻木社)大阪市西區本田三番一ノ五五 | 四五 |
| 忠忠榮(あけび)新潟縣岩船郡神納村 | 四五 |
| 椿浪波(無)千葉縣滑川町 | 四六 |
| 辻三丈子(あけび)秋田縣湯澤町大町七〇富谷方 | 四六 |
| 土屋春波(遠吟社同人)濱松市中島町一九〇 | 四七 |
| 寺村一葉(あけび)香川縣大川郡鶴羽村 | 四七 |
| 寺村公魚(あけび)香川縣大川郡鶴羽村 | 四八 |
| 出本長風(まつやま誌)松山市北八坂町四四 | 四八 |
| 寺尾岐多路(三菱俳句會)新潟縣佐渡郡柏川町馬町二一 | 四九 |
| 寺井竹邸(無)大阪市東淀川區柴原町三ノ三三八 | 四九 |
| 土井更衣(あけび)兵庫縣津名郡山田村 | 五〇 |
| 十川日朗子(松興里同人)朝鮮咸南新興郡東上面漢堡置朝壘社宅 | 五〇 |
| 土岐羽扇(あけび)東京市小石川區音羽町九ノ四 | 五一 |

富永柳星(俳壇通信)山梨縣東八代郡右左口村……………五二
 戸張錦秋(ホトトギス)埼玉縣北葛飾郡三輪野江村中井……………五三
 豊枝一波(あけび)廣島縣御調郡西野村……………五三
 東島白舟(あけび)朝鮮平北渭原郡新川……………五三

ナ

内藤靜蛙(すその)清水市三保町三三二〇……………五三
 中矢城雪(巨湫師)旭川市宮下通り六丁目……………五三
 中屋芳秋()滋賀縣彦根町四……………五四
 中川行人(蝶人師)德島縣板野郡鳴間村……………五四
 中島晴陽(巨湫師)松本市中町二丁目……………五五
 中西紅笙(狼火同人)太阪市浪連區惠美須町二……………五五
 長野天星(西古師)長野縣南高來郡口之津町東大泊……………五五
 長内風舟()北海道阿寒郡舌幸村雄別鑛業所中の澤二九號……………五六
 永濱詠吉(木の花)東京市小石川區江戸川町二十三……………五七

西田鯉淵(あけび)福島縣西白河郡社村……………五七
 西垣棠雨(普門社同人)京都府綾部郡神宮寺……………五七
 西野六朗()富山縣中新川郡東水橋町三七六……………五八
 西井翠石(無)津市伊豫町……………五八
 丹羽蛸峰()北海道勇拂郡苦小牧町……………五九
 新田かんじ(巨湫師)兵庫縣江井町……………五九
 新田沙鷗(稻木主宰)大阪市天王子區筆ヶ崎四……………六〇
 新田雨人(石楠)石川縣羽咋郡北大海村……………六〇
 野本思愁(石楠)愛媛縣南宇和郡御ノ莊町菊川……………六〇
 野中草杖()秋田縣花輪町……………六一
 野村録月(あけび)兵庫縣黒井町……………六一

ハ

橋本赤道(ひむろ)神戸市灘區高羽楠兵一八……………六一
 橋本舞城()東京市芝區新橋四ノ三谷黒方……………六一

橋本 秋更(あけび) 東京市品川区大井關ヶ原町一二九八佐藤方……………三
 長谷川 靜逸(初雁) 静岡縣賀茂郡吉佐見小學校……………三
 長谷 素仙(寒樓師) 大阪市東成區腹見町五〇九……………四
 林野 鷺城(つゝみ同人) 新潟縣中魚沼郡吉田村……………四
 久下 亦春() 大阪市天王寺區上潮町三ノ五三……………四
 人見 雨衫子(無) 岡山縣邑久町太泊村邑久郷……………五
 平松 溪泉() 倉敷市濱田町六一五……………五
 平田 耕基() 廣島縣芦品郡福相村……………六
 平尾 螢草() 滋賀縣蒲生郡武佐村長光寺三二八……………六
 廣津 臥月() 山口縣大島郡日良居村……………六
 深田 白葉() 福井縣遠敷郡内外海村泊海照院……………七
 深澤 花影() 群馬縣北甘樂郡高瀬村桐淵……………七
 福島 あさみ(あけび) 横濱市中區浦舟町五ノ七七奥山方……………七
 藤原 紫陽花(冬葉師) 兵庫縣加古郡加古川町大川町四丁目……………六

藤井 靜紀(あけび) 山口縣佐波郡和田村……………六
 船藤 羊越占(芙蓉同人) 富山縣西礪波郡吉江村……………六
 堀内 翠雨(ゆく春) 神戸市林田區遠矢町二丁目七九……………六
 前田 含水(南柯) 北海道空知郡富良野町……………六
 前原 一星() 布哇ヒロ市……………七
 待留 青丘(あけび) 岡山縣邑久郡太泊村清野……………七
 松浦 一吼(句山師) 千葉縣勝浦町勝浦九二……………七
 松浦 ふさ女(一吼師) 右 同……………七
 増田 西嶽(無) 清水市入江町一ノ一九八……………七
 丸山 耕人(あけび) 岐阜縣惠那郡坂本村千且林……………七
 丸尾 一伸(倦鳥) 兵庫縣生野町五丁目……………七
 三重野 素月(石楠) 大分市外瀧尾八〇一……………七
 南野 浪歌(巨湫師) 長崎縣壹岐郡石田村筒城……………七

南谷尖浪(亞浪師)岩手縣二戸郡福岡町……………七四
 皆川稚翠()栃木縣芳賀郡小見村……………七四
 宮澤里人(無)大阪府南河内郡高鷺村惠我の莊二二一……………七四
 宮部舟水郎(露香師)長野縣諏訪町四賀村神戸……………七五
 宮前松月()川崎市渡田一七六六……………七五
 宮野石楠子(あけび)千葉縣香取郡大須賀村伊能四三〇……………七六
 村瀬曉影(あけび)愛知縣八名郡大和村……………七六
 村上獨風(あけび)栃木縣鹽谷郡大宮村田所……………七六
 森正典(ゆく春)樺太知取町幸町三……………七七
 森白山(あけび)德島市出來島町本町北九四ノ三……………七七
 森下句朗英()富山縣下新川郡宇奈月……………七八
 ヤ
 矢坂紫光(無)朝鮮大卯府東雲町二六一……………七八
 矢土錦殘(京鹿子)三重縣一志郡阿坂村小阿坂……………七九

矢土英城(雲母)右同……………七九
 山口芳泉(南柯同人)東京市大井北濱川町一二二六……………八〇
 山田十暮()茨城縣久慈郡大子町……………八〇
 山岸松想(俳諧)長野縣更級郡篠ノ井町會區二七七……………八一
 矢野貞衣(あけび)兵庫縣江井町……………八一
 湯淺美草女(石楠)德島縣鷺敷町仁宇……………八二
 横倉愛山()東京府下多摩村落合……………八二
 吉原規外(春波主宰)倉敷市東町六七五……………八二
 吉岡句城(俳句研究)東京市澁ノ川區上中里町三六四……………八三
 ヲ
 渡邊石筍(癩祭同人)埼玉縣北葛飾郡南櫻井村……………八三
 渡邊臥龍()秋田縣南秋田郡飯島村……………八四
 渡邊五秋()秋田縣五城目町……………八四
 和田岐泉(あけび)大垣市南顔町二〇〇……………八四

俳句雑誌目録

一、昭和十二年一月現在である。
 一、配列の便宜上五十音順に依つた。
 一、本目録掲載誌は編集部にて極力調査したもののみである故、掲載洩れもあるかも知れぬ。猶ほ次年版に掲載する適當な報告或ひは雑誌一部寄贈下されば幸甚である。
 一、誌名、主幹、發行所、發行所住所となつて居る。

愛 吟 上川井梨葉 五〇
 愛 吟 會 東京市麴町區丸の内三の二併書堂内
 あ げ び 松村 巨湫 二〇
 あ げ び 社 東京市麴町區富士見町三ノ三

俳句雑誌目録

馬 醉 木 水原秋櫻子 四五
 馬 醉 木 發行所 東京市神田區小川町一ノ一
 神田ビル四六號
 阿 蘇 赤星水竹居 三〇
 阿 蘇 發行所 熊本市北新坪町一二四 宮崎方
 天 の 川 吉岡禪寺洞 四六
 天 の 川 發行所 福岡市今泉九四
 あ ら 野 上田 平谷 三〇
 あ ら 野 社 東京市神田區美土代町三〇
 蟻 の 塔 鹽田 紅果 三〇
 蟻 塔 會 金澤市殿町六一
 青 潮 一七
 青 潮 發行所 和歌山縣田邊町上片町
 青 雲 加藤 蕪江 三一
 青 雲 社 秋田市馬口勞町六八

| | | |
|--------|----------|-----------------|
| 稻 | 木 | 新田 沙鷗 二〇 |
| 稻木發行所 | | 大阪市天王寺區筆ヶ崎四 |
| 一路 | 會 | 三〇 |
| 一路會 | | 東京市大森區雪ヶ谷町八四〇 |
| 泉 | | 三〇 |
| 泉發行所 | | 堺市東湊町一三〇九 |
| 蘭の花 | 辻 | 二〇 |
| 蘭の花發行所 | | 岡山市東中市四一 |
| 燕泥 | 西口 百輝 三〇 | |
| 燕泥發行所 | | 大阪市東淀川區本庄川崎町四の五 |
| 雲母 | 飯田 蛇笏 五〇 | |
| 雲母社 | | 山梨縣東八代郡境川村一八六 |
| 渦湖 | | 二一 |
| 渦湖發行所 | | 吳市後山町一一 |
| 歌と句 | 濱出 鐵沙 五 | |
| 馬 | | 七 |
| 馬發行所 | | 東京市品川區大井鈴ヶ森二二七 |
| 大富士 | 古見 豆人 一八 | |
| 大富士吟社 | | 靜岡縣小山町藤曲 |
| 葛飾 | 山田 碧江 一五 | |
| 葛飾發行所 | | 東京市江戸川區平井三ノ一二四 |
| 海蝶 | 同人制 二六 | |
| 海蝶發行所 | | 東京市神田區田代町一 |
| 海霧 | 田邊 天涯 一〇 | |
| 海霧發行所 | | ゆかり吟社 青森市鯉貝二二四 |
| 懸葵 | 大谷 句佛 四六 | |
| 懸葵發行所 | | 京都市猪熊通り三條上ル |

| | |
|---------|----------------------|
| 海紅 | 中塚一碧樓 五〇 |
| 海紅社 | |
| 海紅 | 三 |
| 海紅社 | |
| 海紅 | 東京市世田ヶ谷區若林町一二七 |
| かびれ | 二六 |
| かびれ | |
| かびれ | 加昆禮吟社 茨城縣日立町仲町大雄院内 |
| 鹿火屋 | 原石 鼎 五〇 |
| 鹿火屋 | |
| 鹿火屋 | 東京市麻布區本村町一一六 |
| かつらぎ | 三〇 |
| かつらぎ | |
| かつらぎ | かつらぎ發行所 奈良縣八木町北八木町五八 |
| 雁來紅 | 野田別天樓 三〇 |
| 雁來紅社 | |
| 雁來紅 | 神戸市灘區高羽寺口二〇 |
| 木太刀 | 星野麥人 四〇 |
| 木太刀社 | |
| 木太刀 | 東京市牛込區赤城下町三三 |
| 曲水 | 渡邊 水巴 五〇 |
| 曲水社 | |
| 曲水 | 東京市麴町區麴町四の五 |
| 簇 | 繼 |
| 簇 | |
| 簇 | 簇繼發行所 大阪市住吉區平野西之町 |
| 京鹿子 | 鈴鹿野風呂 三〇 |
| 京鹿子發行所 | |
| 京鹿子 | 京都市左京區吉田中大路八 |
| 漁火 | 横山 巖樓 二五 |
| 漁火發行所 | |
| 漁火 | 明石市茶園場町 |
| 京大俳句 | 三一 |
| 京大俳句發行所 | |
| 京大俳句 | 京都市東山通り丸太町上ル東 |
| 九年母 | 二六 |
| 九年母發行所 | |
| 九年母 | 神戸市湊區馬場町四一四 |
| 草萌 | 二六 |
| 草萌發行所 | |
| 草萌 | 東京市麴町區丸の内三菱二十一 |
| 草莖 | 宇田 秀雨 一〇 |
| 草莖發行所 | |
| 草莖 | 東京市麴町區丸の内三菱二十一 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------|---------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|-------------------------|---------------------------|--------------|--------------------------|--------------|----------------------------|--------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|----------------------------|--------------|--------------------------|--------------------------|--------------|----------------------------|---------------------|---------------------|
| 草 壘社 東京市世田ヶ谷區代田二ノ七三 三 | 句と評論 藤田 初巳 三〇 | 帝都書院 東京市澁谷區代々木初臺町六七 二 | 句 帖 東京市大森區山王二ノ二二一〇 三〇 | 句 帖 東京市大森區山王二ノ二二一〇 三〇 | くだかけ 東京府北多摩郡神代村入間一 二〇 | くだかけ社 東京府北多摩郡神代村入間一 三〇 | 雞 頭 東京市澁谷區瀧の川町五七二 三〇 | 雞頭發行所 東京市澁谷區瀧の川町五七二 三〇 | 雞頭陳 小野 蕪子 三一 | 雞頭陳社 東京市澁谷區新町一ノ五ノ一 三〇 | 倦 鳥 松瀬 青々 五〇 | 倦鳥發行所 大阪府岸和田市岸城町一八七三 三〇 | 曉 雲 青木 郭公 三五 | 曉雲社 札幌市南一條西十二丁目 三五 | 櫻 東京市麴町區九段二ノ六の六 三五 | 櫻發行所 東京市麴町區九段二ノ六の六 三五 | 木の花 東京市荒川區尾久町五ノ一六六 二五 | 木の花 東京市荒川區尾久町五ノ一六六 二五 | 駒 草 東京市杉並區西田町一ノ四五七 二六 | 駒草發行所 東京市杉並區西田町一ノ四五七 二六 | 高 潮 服部 耕石 四〇 | 高潮社 東京市牛込區新小川町三ノ一九 四〇 | 高潮社 東京市牛込區新小川町三ノ一九 四〇 | 黄 橙 勝峯 普風 四〇 | 黄橙發行所 東京市杉並區高圓寺六の七三〇 四〇 | さいかち 川崎市宮前町二一 三一 | さいかち 川崎市宮前町二一 三一 |
|--------------------------|---------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|-------------------------|---------------------------|--------------|--------------------------|--------------|----------------------------|--------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|----------------------------|--------------|--------------------------|--------------------------|--------------|----------------------------|---------------------|---------------------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|-----------------------------|--------------|--------------------------|---------------|--------------------------|--------------|--------------------|--------------------|--------------|---------------------------|--------------|------------------------|--------------|----------------------|--------|----------------------------|-------------|--------------------------|--------------|------------------------|--------------|--------------------------|---------|--------------------------|--------|---------------------------|
| さつき 黒岩 漁郎 四〇 | さつき發行所 東京市世田ヶ谷區上馬町一ノ六 六〇 | 山茶花 野村 泊井 四〇 | 山茶花發行所 大阪市東區小橋西之町一 四〇 | 産業俳句 大澤 葭水 一〇 | 産業俳句社 名古屋市東區田代町東畑五 一〇 | 辛 夷 前田 普羅 四二 | 辛夷社 富山市彌生町四三 四二 | 辛 夷 富山市彌生町四三 四二 | 鹿 笛 田中 王城 三一 | 鹿笛句會 京都市下京區御幸町綾小路下ル 三一 | 時 雨 中島 藤六 三〇 | 時雨吟社 札幌市南二條東三ノ一〇 三〇 | 石 楠 白田 亞浪 五〇 | 石楠社 東京市中野區西町四〇 五〇 | 春 蘭 三〇 | 春蘭發行所 東京市小石川區大塚坂下町九二 三〇 | 初 冠 森 無黄 三〇 | 篤吟社 東京市世田ヶ谷區松原町四ノ一 三〇 | 春 泥 大場白水朗 三〇 | 春泥社 東京市澁谷區大和田町九三 三〇 | 蕉 風 天野 雨山 三〇 | 蕉風社 東京市世田ヶ谷區太子堂町四五 三〇 | 新興俳句 一五 | 新興俳句發行所 神戸市林田區町二ノ七 一五 | 樹氷林 一五 | 樹氷林發行所 東京市板橋區清水町一六七 一五 |
|--------------|-----------------------------|--------------|--------------------------|---------------|--------------------------|--------------|--------------------|--------------------|--------------|---------------------------|--------------|------------------------|--------------|----------------------|--------|----------------------------|-------------|--------------------------|--------------|------------------------|--------------|--------------------------|---------|--------------------------|--------|---------------------------|

水 明 長谷川かな女 五〇
 水明發行所 東京市杉並區天沼二四七七
 すその 原田 濱人 二五
 すその發行所 沼津市宮町西光寺内
 赤 壁 山田 秋雨 二七
 赤壁吟社 東京市中野區大和町四二
 石 鳥 井上 日石 三五
 石鳥社 東京市目黒區碑文谷一ノ二二〇
 挿 雲 矢田 挿雲 五〇
 挿雲發行所 東京市本區所區龜澤町四ノ一一
 層 雲 萩原井泉水 五〇
 層雲社 東京市麻布區區新堀町三
 草 上 伊東 月草 五〇
 草上書屋 東京市世田ヶ谷區經堂町四〇四

早 春 永尾 宋斤 四〇
 早春發行所 大阪市西區西道頓通り五ノ三五
 草 山 横山うさき 二〇
 朗 詠 社 東京市芝區豊岡町四二
 斷 層 西村白雲郷 二五
 斷層發行所 大阪市南區北桃谷町八
 大 樹 芹田 秋双 四〇
 大樹發行所 大阪市北區堂山町七四
 太 白 田中田士英 三〇
 太白發行所 長崎市東古川町五
 玉 藻 星野 立子 四〇
 玉藻社 東京市麴町區丸ビル八七六
 ちまき ちまき 三〇
 ちまき發行所 東京市澁谷區代々木西原町九三
 七

獺 祭 吉田 冬葉 四一
 獺祭發行所 東京市品川區東大崎四丁目
 筑 波 伊藤 松宇 四一
 にひはり社 東京市小石川區關口町芭蕉庵内
 露 一五
 關西藝術新聞社 西宮市川添町一一
 東 炎 志田 素琴 四〇
 東炎山房 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ
 二四
 同 人 青木 月斗 五〇
 同人社 大阪市北濱町二ノ二四
 唐 辛 子 紫田 桃弧 二〇
 唐辛子發行所 岡山市弓之町八一
 土 上 嶋田 青峯 三〇
 土上發行所 東京市牛込市若松町八二

十和田 増田平古奈 二一
 十和田發行所 青森縣大鰐温泉
 童 魚 三〇
 童魚社 東京市下谷區上野廣小路町一四
 東南風 一五
 東南風發行所 東京市神田區須田町二の四
 南 風 二六
 南風發行所 大阪府豊能郡豊中町高砂通り三
 丁目
 南 柯 渡邊 志豊 二〇
 南柯吟社 東京市赤坂區傳馬町二ノ四
 ぬかご 安藤姑洗子 三五
 ぬかご社 東京市赤坂區新坂町八二
 野の聲 鈴木 宗石 二〇
 大東社 愛知縣中島郡起町

| | |
|-----------------------|-----------------------|
| 俳句研究 綜 合 五〇 | 俳人 三〇 |
| 改造社 東京市芝區新橋七の二二 | 俳人發行所 東京市大森區田園調布二ノ七二 |
| 俳句世界 金兒杜鵑花 二五 | ○ |
| 素人社 東京市本郷區眞砂町一五 | 梅檀 東京市豊島區堀の内町一五〇 |
| 初雁 道部 臥牛 三〇 | 晚鐘 廣島市牛田町八六九 |
| ○ 東京市世田ヶ谷區松原二ノ七一 | 俳星 岩動 炎夫 三六 |
| 俳諧 一五 | 初潮 秋田縣能代港町 一七 |
| 俳諧社 東京市荏原區中延町一〇六九 | 俳句新聞 下關市豊町八三六 一一 |
| 俳句春秋 飯尾 咄木 三〇 | 交蘭社 東京市小石川區江戸川町一八 |
| 俳句春秋發行所 大阪市住吉區阪南町中四の二 | 初鴨 初鴨發行所 福島縣耶摩郡磐梯村 二〇 |
| 俳句生活 二〇 | |
| 俳句生活社 東京市京橋區月島西中通二ノ一二 | |
| 俳陳 二〇 | |
| 俳陳社 東京市淀橋區戸塚町三ノ三二三 | |

| | |
|-------------------------|---------------------------|
| 俳壇通信 犬塚 楚江 一五 | 糸瓜 田澤 龜生 一五 |
| 俳壇通信社 東京市大森區入新井一ノ二〇五七 | 糸瓜社 東京市江戸川區小岩町八丁目 |
| 俳句往來 五 | ホトトギス 高濱 虛子 五五 |
| 艸書房 東京市牛込區新小川町二の四 | ほととぎす發行所 東京市麴町區丸の内ビル八 七六 |
| 菱の花 一五 | 帆 中臺 春嶺 一七 |
| 菱の花發行所 東京市品川區大井伊藤町六一一 三 | 帆發行所 東京市荏原區下神明町三〇二 |
| 東山 三〇 | ましろ 三〇 |
| 梅黄社 京都市東山區高台寺南門通榭屋 町 | 眞白社 東京市淺草區菊屋橋二ノ一 二五 |
| ひむろ 志賀 華丘 三〇 | 滿洲 滿洲俳句會 大連市神明町一〇〇江口新方 二〇 |
| ひむろ社 神戸市湊區楠谷町一八 | 三田俳句 三田俳句會 東京市芝區高輪町一四辰澤方 |
| 風流陳 一五 | 水鳥 和田 御雲 三五 |
| 文藝汎論社 東京市品川區大井康塚町四九二 八 | 水鳥發行所 神戸市須磨區若宮町和田方 |

| | | |
|-------|----------|-----------------------|
| 木犀 | 河野 静雲 | 木犀發行所 福岡市馬出本町一〇三四 |
| 山葡萄 | 江口帆影郎 三一 | 山葡萄發行所 朝鮮元山府松下里九一 |
| ゆく春 | 室積 但春 五〇 | ゆく春發行所 東京市麴町區麴町四丁目八ノ一 |
| ゆうかり | 山本 孕江 三五 | ゆうかり吟社 台北市大安十二甲四一四 |
| 龍燈 | 三五 | 龍燈發行所 熊本市新屋敷町二〇一玉崎方 |
| 黎明 | 黎明居紫舟 三〇 | 黎明發行所 東京市牛込區戸山町二三 |
| わか芽 | 二〇 | わか芽社 大津市葭屋町一五 |
| 若竹 | 富田 潮兒 二〇 | 若竹吟社 愛知縣西尾町 |
| 早稻田俳句 | 一五 | 早稻田俳句社 東京市牛込區早稻田鶴巻町三〇 |
| 若葉 | 四中根方 二二 | 若葉發行所 東京市大森區池上徳持町四 |

俳書レヴュー

大體此處に輯録する俳書は、本書編輯着手前一年間のものである。出来るだけ廣範圍に亘つて輯録したつもりであるが、記載洩れもあるかも知れぬが御諒承を願ふ。また、記載順序は不同である。

現代俳句論 水原秋櫻子著

人も知る馬酔木の主宰者水原氏の現代俳句論で、主として現代俳句の解説を爲し、更に作法指南を兼ねたもので、水原氏の俳句イデオロギイを知るには良き書と云へよう。第一には俳句の本質に對する諸考察を各五章に分ち研究解説し、第二は作法雜記を同じく五章に分け詳述し、

第三は俳句の評釋である。俳句は日に日に新らしくなつて行くので、古い俳句觀を持つてしては到底作句することも鑑賞することも出来ない。本書は現代俳句の理論と鑑賞と製作との懇切な指導書である。と云つてゐる。(新思想藝術叢書 四六判二八六頁 定價一圓 第一書房刊)

俳句及俳壇を説く 伊藤 鷗二著

著者が俳壇批評家であることは、既に廣く知られてゐる處、本書は評論二十九篇、小品十篇と他に太紙句解があり、鷗二俳論に次ぐ文集である。評論と云ふと妙に六づかしい字句や、云ひまはしをするものであるが、本書はその點すらくくと讀み得るもの。(四六判三五〇頁定價

一圓二十錢 交蘭社刊)

穢土寂光 飯田蛇笏著

本書は著者の小品隨筆文集で、日々雜誌に發表したものを纏めたもの、誰が讀んでも面白くまた教へられる處が多い。(四六判二圓二十錢 野田書房刊)

一碧樓一千句 中塚一碧樓著

著書が新傾向俳句雜誌「海紅」の主宰者であることは御存知の通り、本書は一碧樓氏五十回誕辰記念出版である。既刊の句集より再選し更に新作を加へたもの。新傾向を學び、或ひは知らんとする者には必讀の書。(定價二圓 海紅

社刊)

長子 中村草田男著

日野草城氏と論争してゐる草田男氏の句集、ホトトギス掲載の三百餘句を收めたものである。(四六判 定價一圓八十錢 沙羅書房刊)

長谷川春草句集

文學の神様横光利一氏、及びAK演藝課長傘雨亭久保田萬太郎氏の序あり、生前の句は殆ど網羅されてある。(四六判二百二十餘頁 定價一圓五十錢 さつき發行所刊)

現代名家女流俳句集

書名の通り現代の女流句作家百七十一人の三十句づゝの自選句集で、女性としての男性には見られない、繊細な感情のうたはれてゐるのは好ましい。(四六判三四〇餘頁 定價一圓五十錢 交蘭社刊)

添削本位

俳句講座

藤井 紫影 鑑修
幸田 露伴

俳壇第一流の作家が夫々執筆してゐる綜合俳句講義である。俳句はどうして作るべきかと迷ふ初學者にも、俳壇の大家に親しく添削を受けて練磨したいと云ふ人達にもよいと云ふ處に力を入れて添削に獨特の特長ある講座である。(菊判全十二卷 六ヶ月修了 月一圓二十錢宛

日本俳句研究會刊)

季題新表 勝峰 晉風編

本書の内容は、現代行はれてゐない季題、要するに古い季題を除いて、更に新季題を加へ、季令・世相・景觀・生態の四部門に分ち三月・四月・五月の三ヶ月を春として以下之に準じて編纂したもの。斯様に分類することも面白いと思ふ、また色々の事を知り得る。(四六半裁判 二三〇頁 定價五十錢 黄橙社刊)

新様季寄せ 松村 巨湫編

本書は従來の季寄せ編纂とは全然その趣向を異にし、その季語を春夏秋冬の縦に配列して、

一目のもとに四季の季語を見せることは正に劃期的な季寄せと云へよう。季の循移そのまゝの季寄せと云ふてゐるが肯づかれる。兎に角今迄に前例のないものだけに、種々な論議をかもすことは必然、そしてまた大いなる示唆と、新らしき道をひらいたるは誰しも認めることであらう。その他七十二候に依つた新様季節暦、國藝年中行事、氣象表、俳句作法講話等の附録がある。(三六判五百六十八頁 定價二圓 艸書房刊)

相馬虚吼句集

相馬 虚吼著

ホトトギス系の山茶花叢書第二編、一千餘の句を収録し、更に小照墨蹟年譜を付してあり、

虚吼氏の全貌を知るによい句集である。(四六判二百餘頁 定價一圓五十錢 山茶花發行所刊)

唐辛子句集

西村 燕々編

唐辛子刊行十週年記念に刊行されたもので、三千近く収録されてゐる。(四六判二六二頁 定價二圓 唐辛子發行所刊)

みそ菘

渡邊 水巴選

曲水叢書第七編で、最近物故した曲水作家拾參生、國郎、谷水、古錢子、羽村、摩山、水成林の七氏の句を水巴氏が再選したもの、それぞれの風格がしのばれてよし。(四六判八〇頁 定價五十錢 曲水社刊)

いとう句集

久保田萬太郎選

徳川夢聲、五所平之助、堀内敬三、秦豊助等のお歴々をも加はつてゐる春泥のいとう句會第一回より第二十五回迄の句作を収めたものである。(四六判 定價一圓 春泥社刊)

つばめ

星野 麥人編

木太刀年刊集。(定價二圓 木太刀社刊)

俳句初學講習録

素人社刊

内容は作法講義、俳句用語解説、季語解説、俳句語法、俳句評釋、現代俳句選で極く初心者向きものである。(菊判一三〇頁 定價五十錢)

渡佛日記

高濱 虚子著

本書は虚子翁の世界漫遊、即ち昭和十六年二月十六日横濱を發し、パリ、ベルリン、ロンドン等を吟遊して六月十五日横濱に歸つて來る迄の四ヶ月間の日記である。寫真多く、また句多く、ヨーロッパ吟行録とも見られよう。また本書には例の問題を起した熱帯季題論もあり、一讀はして置くべきである。他に章子嬢の旅だより、また新聞に掲載された通信等ある。(四六判五四〇頁 定價二圓 改造社刊)

春籠 秋籠

山口 春郎著

本書は花のある隨筆につぐ第二文集で、長短

四十有餘篇を收め、清麗な文章はよく讀者を魅了するところである。(四六判三三〇餘頁 定價二圓 龍星閣刊)

風土的倫理詩 松村 巨湫著

季は一つの宇宙観であるとみる著者が、此の宇宙観を根本として俳句と云ふものに「風土人のまこと」をみるのが新らしい俳句生活であるといふのである。厳しく書かれてある爲め相當取りつき難い所もあるが、かみしめて讀めば良し。(四六判八十頁 定價三十錢 艸書房刊)

郷愁の詩人與謝野蕪村 萩原朝太郎著

著書は詩人であり俳人ではない、従つてより

詩人的な観方が多いかも知れないが、何處か共通する處あると見えて、中々教へられる處が多い。(四六判一六五頁 定價一圓 第一書房刊)

奥の細道古註 萩原井泉水編

本書は著者獨特の註書で蕪村の原畫を模した淡彩畫二十五枚ついてゐる。(菊判二〇二頁 定價二圓 育英書院刊)

大芭蕉全集 大觀堂刊

その名の通り大芭蕉に關する凡ゆるものを收めてある。(四六判各冊四五〇頁 各定價二圓)

季節手帖 日本季節研究會編

吾人は季と云ふものを餘りに没却してゐる、

季を識り、味ひ、自覺を強め深くする爲に、と云ふ觀點から日記欄を一ヶ月三句に分け、季節曆を付けて季節意識をもつたもの。何か物足らぬ處もあるが、季節手帖とはいふ名である。(三六判二百餘頁 定價七十五錢 艸書房刊)

田庭句集子規歿後集 杉山 田庭著

著者明治三十五年から大正十年までの作を收む。(四六判一六〇餘頁 定價一圓五十錢 關西藝術新聞社刊)

草坡句集 水野 草坡著

曲水叢書第五編(四六判八〇頁 定價六十錢)

曲水社刊)

正岡子規文學讀本 河東碧梧桐編

子規の偉大な業績中でも、第一に擧ぐべきは俳句である。月並俳句は彼によつて止揚された今日の澎湃たる新俳句の運動もその淵源は子規にあると云へる、此の俳聖子規の業績を選稿して纏めたもの、俳句・歌論・文學論等豊富、勉強家は一讀すべきだ。春夏の巻、秋冬の巻とある。(各冊四五〇餘頁 定價各一圓五十錢 第一書房刊)

こてまりの花 山本 岬人著

ホトトギス及び馬酔木に投稿したものを纏め

たもの。(四六判一九〇餘頁 定價一圓五十錢
馬酔木發行所刊)

あけび句集 あけび社刊

雑誌あけび、一年間の掲載句を更に選稿して
一冊に纏めたもの、外に文集、季語索引、住所
録等ある。(四六判二三〇頁 定價一圓五十錢)

石鳥句集 石鳥社刊

雑誌石鳥一年間に於ける作品より千餘句を選
出して纏めたもの、他に季語索引がある。(四
六判一八〇頁 定價一圓二十錢)

生活俳句提唱 黒田忠次郎著

一部の人は生活俳句と殊更云ふ必要はないと
云ふては居るが、併し生活俳句と云ふ、意圖は
吾人も大いに考究する要があると思ふ。本書は
「生活派俳句理論序説」「實生活と俳句との結
合」「生活派俳句集」の三篇からなり理論及び
俳句を通して著者の熱を知り得る。(四六判
定價一圓二十錢 香蘭詩社刊)

子規言行録 河東碧梧桐編

俳聖子規と親しかつた人々、不折・漱石・紫
影・虚子・露月・柳堂・碧梧桐・紅緑等の子規
を語るまでの、六十有篇明治俳壇の生きた資料
となるであらう。(四六判七四〇頁 定價三圓
政経社刊)

編輯餘語

現代新進俳句集十二年版上梓に當り編輯餘語の題のもとにその経緯及び抱負の若干を記して置
きたいと思ひます。

此の企劃發表は十一年八月でありますが、何分各方面に宣傳の行き届かなかつた事は甚だ残念
でありました。然し他面亦意外と思はれる程の支持を得て當書房としても雀躍大いに力を得たの
であります。その最もなものは大阪市の稲木社と同社主宰の新田沙鷗氏であります。同氏の好意
的援助には改めて深く感謝致します。

その他當書房の計畫を熟知せられた方や、友人にきいて知られた方等舉つて寄稿された事は厚
く感謝する次第であります。と同時に當房としても益々皆様の期待に背かない良いものを作り、
自分の句がこれに載つてゐるのだ、而も堂々とその一部分を完全に自分で占めてゐる、云はゞ自
分の句集であると云ふ處のものにする抱負のもとに完成に邁進したのであります。

もとく作句せられる方は雑誌に掲載されただけでは物足らない、單一なその社だけの句集に

收められるのも結構ではあるが未だしと思ふ所あり、とか云つて自己一人で自分の作品集を纏める程でもない、兎に角一年間の作品の中自分の好きな句だけでも何等か効果的な方法で残して行きたい、といふのは誰しもであらうと思ふのであります。當書房ではこれを思ひ、あれを考へての結果、幾らかでもその一助になればと思惟し、同時に作品、作者を全句作家に公開し、相互に鑑賞も出来ること云ふ權威あるものを刊行して行かうと云ふのが、本書刊行の根源であります。幸ひ此處に第一版が上梓された事は寄稿支持者各位の賜物であり同時に當房としても聊か自負する所ある次第であります。然し亦、萬全を期した事は勿論でありますが多少手違ひもあるかも知れないけれど、次年版にそれを補なふとして寛恕の程お願い致します。

此の題名も新進俳句と云ふ語義から相當論議されましたし亦色々の題名を考慮したが結局此の濃澗たる題名に落着いたのです。くはしくははしがきにもある故此處では略すことにします。

こうして當房に着いた句はそれ〴〵の手續を踏み分類され割付けられて組版され、校正も嚴重に、殊に作者の意志を尊重して本に成つたのであります。五十音順にし、作者住所録に頁を付して一見立ち處に自己の句、また誰々氏の句と見られる様便をはかつたのも、作者を主とした一つの現はれであります。此の外、新様季寄せ出版記念、松村巨湫先生選の新季語「夏騒」による

入選作品も特に併録致しました。所屬と云ふことも作者の俳歴をもう少しはしく載せる豫定でありましたが、作者にとつて都合悪きこともあると思ひ單に所屬名に停めました。俳句雑誌は充分調査しましたが若干主宰者、或ひは主幹の不明なもののあるのは遺憾でありました。次年版にはもつと餘裕あるものにしりたいと思つて居ります。俳書は出版月報その他に依り選出し、實物は圖書館又はその他により筆を取つたのであります。

終りに定價及び販賣であります。定價も實費をと云ふ處から底廉に務め、例へ頁増大せようとも値上げはしないことにして居ります。販賣は當房取引全國書店を飾ることは勿論、直接にお求めになれば新しい本をお送り致します。

装幀及び體裁等は實物を見ればお解りになること、思ひ喋々云ひませぬ、唯全能を動員して事に當つたことを強調して、ペンを擱きます。

新進俳句集輯纂所

責任者 波野花水木識

御願ひ

投稿は凡ゆる句作家を動員したいのです、是非知己俳友をお誘ひして投稿をお願ひします。

俳句雑誌の凡ゆるものを、定價、主宰者（主幹）發行所及び住所を御知らせ下さる様、一部なりとも御寄贈下さらば幸甚と存じます。

新刊俳句關係書、俳書（句集も）を内容、定價、發行所をお知らせ下さい。投稿用紙は申込次第お送り致します。

編纂上御氣付の點、御意見などお寄せ下さらば参考斟酌致します。

昭和12年3月25日印刷

昭和12年4月1日發行 ● 定價 壹圓

編者 艸書房
新進俳句集輯纂所

發行者 石井益夫
東京市牛込區新小川町2の4

検印

印刷者 高橋石藏
東京市神田區西神田2の7

整版 高山整版所・製本 田中製本工場

發行所 東京市牛込區
新小川町2の4 ● 艸書房
振替東京一〇〇〇三七番

俳句界の異色紙誕生
四六倍判四頁一部五銭

刊 月

俳句往來

東京市牛込區新小川町二の四

發行所 艸 書 房

振替東京一〇〇〇三七番

從來の俳句雜誌が純粹俳句雜誌と云ふならば、本誌は正にキング的存在の大衆誌であると斷言出来る。新らしい抱負と、新らしい境地と、新らしい生活感情と、を盛つた本誌は、求むるものの心を一杯に満たしてくれるであらう！

□申込次第無代贈呈・掲載原稿（種類を問はず）投稿を乞ふ――

松村 巨 湫 著 新 様 季 寄 せ

三六判六百頁クローズ装函入
定價 貳 圓 送料十銭

壽期的循環式編纂は俳壇に大センセイションを巻き起した。俳壇の季の問題は本書に依つて解決した。一人一冊は必ず持つべき唯一の正しい季寄せ、解りよく親切で、初必者にも研究者にも絶対的の良書！

馬淵冷佑・矢田枯柏著 兒 童 俳 句 の 學 ば せ 方

四六判二百五十頁クローズ美装
定價一圓五十銭 送料八銭

一には國定小學讀本に現はれたる俳句の取扱方を正し、一には綴方科の一目としての兒童俳句の創作並に鑑賞の眞生命を説く以て兒童俳句の意義と價値を明らかにするを得べし（東京朝日）

艸 書 房 編 纂 俳 句 手 帳

袖珍版二百頁布装
定價十五銭 送料四銭

手帳中の白眉 俳畫カットを美麗印刷した、獨特の手帳。ポケットでも何處でも邪魔にならぬ可憐な手帳。そして又こよなきサイン帳を兼ねる手帳。古今名句集・俳友録附――

代 理 部 ニ ユ ー ス

御照會 返信料 附願す
代 理 部 の 是 科 利 用 費 下 さい。 籍 書 名 著 行 發 行 籍 書 出 來 だ 記 明 け 下 さい。
思 考 的 代 理 部 籍 書 出 來 だ 記 明 け 下 さい。 籍 書 名 著 行 發 行 籍 書 出 來 だ 記 明 け 下 さい。
御 照 會 返 信 料 附 願 す

松村巨湫氏編著

現代俳句表現辭典

三六判總クローズ編入七百六十頁
定價二圓五十錢 送料本番房負擔

松村巨湫先生の處女單行本で、

それこそ心血を注いで完成したもので、内容の明確にして親切、その述ぶる處は既に絶讃を得て居るもの、まだ見ない方はすぐ求めよ

内容の一部 表現、用語、季語の三大部門からなり、それが総合的に組織類纂されてある。表現は五十音順に排列され検索頭語と例句千五百語、またあらゆる修辭上の引例解説附。用語は作句上凡べの多数の用語と例句が、季語は四季新年の季語例句が擧げてある。

評釋名句叢書

菊半截判美裝
定價各三十五錢
送料當書房負擔

餘りにも有名な先人の其の名句を、最も適切な評釋をした名句叢書は、必ずや諸士の血となり肉となることは言を俟たぬ。しかも此の廉價版!!

幸田露伴著 芭蕉の名句

吉田冬葉著 蕪村の名句

白田亞浪著 子規の名句

白田亞浪著 一茶の名句

岡倉谷人著 其角の名句

岡倉谷人著 嵐雪の名句

東京市牛込區新小川町二ノ四

艸書房代理部
振替東京一〇〇〇三七番

369
495

終

